四條畷市埋蔵文化財包蔵地調査概報11

岡山南遺跡発掘調査概要・Ⅱ

――四條畷市大字岡山所在――

1982・3

四條畷市教育委員会

四條畷市埋蔵文化財包蔵地調査概報11

岡山南遺跡発掘調査概要・Ⅱ

――四條畷市大字岡山所在――

1982・3

四條畷市教育委員会

はしがき

この報告書は、昭和56年度国庫補助事業として、四條畷市岡山，片町線忍ケ丘駅前整備にかゝる緊急発掘調査の概要であります。

この調査は、昭和50年より実施してまいりました岡山南遺跡の第６次調査にあたるもので、今回の調査地からは、上層より鎌倉時代の掘立柱建物跡、下層より古墳時代中期の遺物を包含する大溝Ｂと、縄文時代晩期の土器を包含する大溝Ａが検出されました。

大溝Ｂからは小形丸底土器・大鉢等土師器多数と古式の須恵器が出土しており、大溝Ａからは縄文晩期の土器片が多く出土し、岡山南第三次調査における大溝とのつながりを確認することができました。特に第３次調査で発見された石鏃・石斧等の石器は、今回の縄文時代晩期の土器片の出土によりその関連が明確となりましたし、家型埴輪の出土した大溝との関連でより一層この時期における岡山南遺跡の様子が明らかとなりましたことは今回の調査で特筆できるものであると思います。

調査に関しましては、大阪府教育委員会のご指導を受け、地元の岡野昌三氏南川謙二氏のご協力をいたゞき深く感謝を申しあげます。

四條畷市教育委員会

教育長　櫻　井　敬　夫

例　　言

1．本書は、四條畷市教育委員会が、昭和56年度国庫補助金事業（総額2,000,000円、補助率――国庫50％、府費25％）の交付を受けて担当実施した四條畷市岡山所在岡山南遺跡の発掘調査事業の概要報告書である。

2．調査は、昭和56年7月1日に着手し昭和57年3月31日まで調査及び整理作業を行った。

3．発掘調査は、四條畷市教育委員会社会教育課技師・野島　稔を担当者とし、補助員として、櫻井　誠・前田　暢・川本　英・林　清文・東村博生・増田秀典があたった。

　出土遺物の整理・実測などについては、野島　稔・川本三智子・阪本冨美子・一色ルリ子・井上智子・植田真紀・南野智子・金田晶子・松岡俊江・飯塚里都子・樋口博子があたった。

4．本書の執筆は、野島　稔が行った。

5．発掘調査の進行・報告書作成などについては、同志社大学・瀬川芳則、大阪府教育委員会・井藤　徹・堀江門也、東大阪市教育委員会・下村晴文、寝屋川市教育委員会・塩山則之、大東高校・山口　博、畷古文化研究保存会、木下義秋、（財）枚方市文化財研究調査会の諸機関、諸氏から種々のご教示をうけた。明記して厚く感謝の意を表したい。

6．発掘調査の進行については、土地所有者・岡野昌三、南川謙二両氏には終始懇切なご協力をうけることができた。

本　文　目　次

はしがき

例　　言

Ⅰ　調査に至る経過 …… 1

Ⅱ　遺跡の位置と歴史的環境 …… 4

Ⅲ　調査概要報告 …… 8

　A．層　序 …… 8

　B．遺　構 …… 11

Ⅳ　出土遺物 …… 16

Ⅴ　まとめ …… 24

Ⅵ　掲載遺物観察表 …… 29

挿　入　目　次

第１図　岡山南遺跡調査地位置図 …… 2
第２図　岡山南遺跡周辺地形遺跡分布図 …… 5
第３図　岡山南遺跡遺構配置図 …… 9
第４図　岡山南遺跡大溝Ｂ内土器出土平面実測図 …… 13
第５図　縄文土器拓影 …… 17
第６図　出土土器実測図・Ⅰ …… 18
第７図　甕法量 …… 19
第８図　出土土器実測図・Ⅱ …… 20
第９図　出土土器実測図・Ⅲ …… 21
第10図　岡山南遺跡大溝Ｂ遺物出土地点実測図 …… 25

図　版　目　次

図版１　遺跡周辺の航空写真

図版２　岡山南遺跡遠景

図版３　調査前全景及び遺構検出状況

図版４　大溝Ａ・大溝Ｂ全景

図版５　大溝Ｂ内土器出土状況

図版６　大溝Ｂ内土器出土状況

図版７　大溝Ｂ全景及び断面

図版８　遺物写真・土器Ⅰ

図版９　遺物写真・土器Ⅱ

図版10　遺物写真・土器Ⅲ

図版11　遺物写真・土器Ⅳ

図版12　遺物写真・土器Ⅴ

図版13　遺物写真・土器Ⅵ

図版14　遺物写真・土器Ⅶ・円筒埴輪

図版15　遺物写真・石器Ⅰ・土器Ⅷ

図版16　遺物写真・土器Ⅸ

図版17　大溝Ｂ内伴出遺物・Ⅰ

図版18　大溝Ｂ内伴出遺物・Ⅱ

岡山南遺跡発掘調査概要・Ⅱ

Ⅰ　調査に至る経過

岡山南遺跡は、四條畷市岡山238-1他の府道枚方・富田林・泉佐野線バイパスを中心とする北は市道忍ヶ丘駅前線から南は市道蔀屋清滝線に至る約400ｍの範囲を周知の遺跡としている。この遺跡のある忍ヶ岡丘陵には、住宅・スーパーマーケット・工場が密集していく地域であり、今回の調査地は府道バイパスの残地として残されていた場所である。

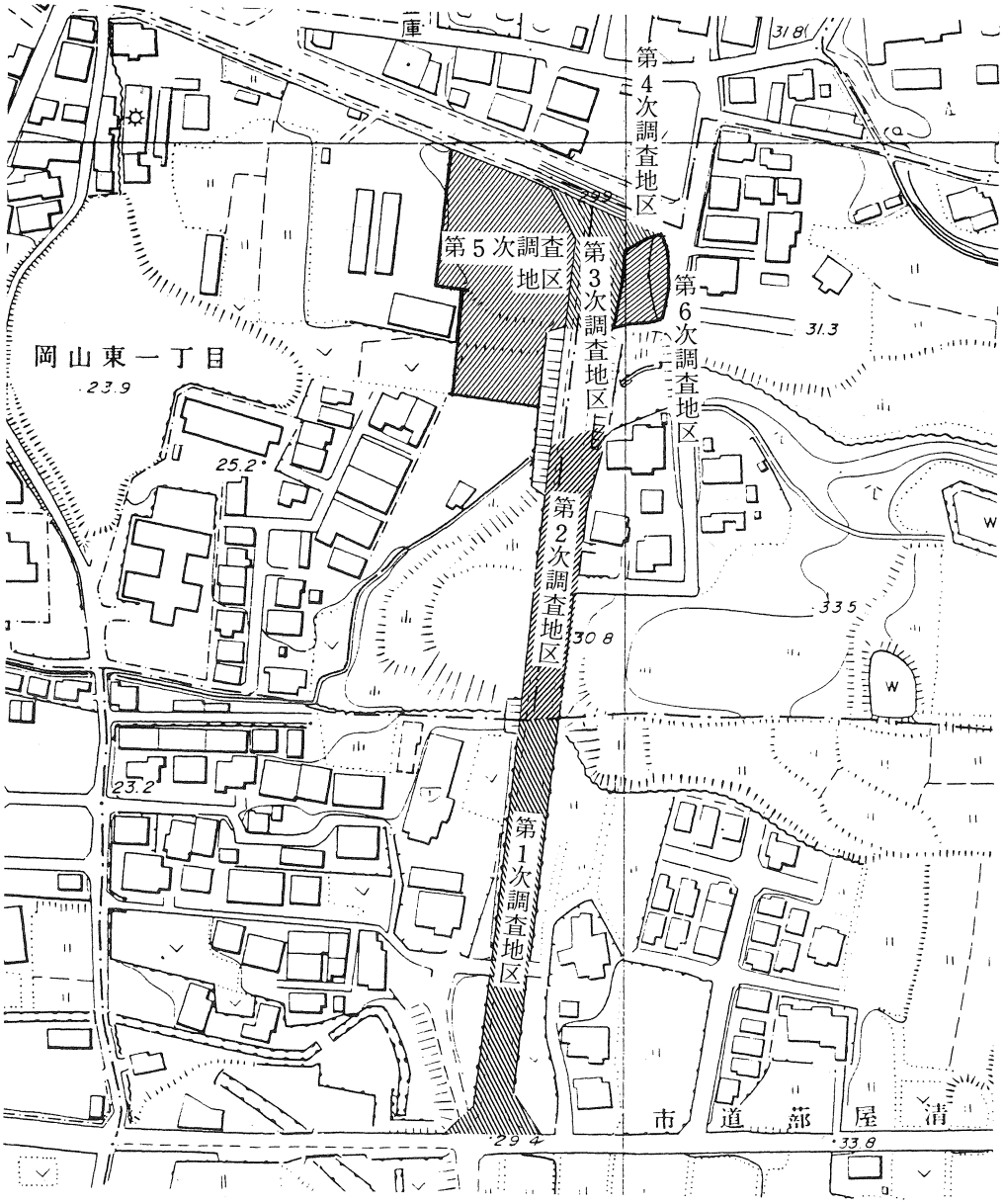
昭和50年、府道枚方・富田林・泉佐野線新設バイパス工事中に古墳時代中期の土器片を遺跡パトロール中に発見されたことによって遺跡の存在が知られるようになった。
同年10月から11月にかけて、遺跡の範囲及び遺構の保存状態を正確に把握するために第１次発掘調査を実施した。その結果、府道新設バイパス予定地全域の市道忍ヶ丘駅前線から市道蔀屋清滝線内において古墳時代から江戸時代に至る複合遺跡が確認された。

この第１次発掘調査の結果を大阪府教育委員会を通じ大阪府土木部に連絡がなされ、大阪府土木部・大阪府枚方土木事務所・大阪府教育委員会、四條畷市教育委員会と再三にわたり協議をした結果、府道新設バイパス建設に先立ち全面の発掘調査を行うことになった。
バイパス予定地内には生駒山系から派生する２本の丘陵からなっており、南側丘陵を昭和51年３月から４月に第２次発掘調査とし、51年７月から10月までを第３次発掘調査としてそれぞれ実施した。

第２次発掘調査地から、約８メートル内外と推定される方形プランの竪穴式住居跡と、掘立柱建物跡及び溝状遺構が検出した。
竪穴式住居跡は調査地の南西端に検出したもので規模は東南辺で約7.5ｍで、北東辺は約５ｍまで測れるのみで全体の大きさは先にも推定で示した通りの規模であろう。
又、掘立柱建物跡の柱穴から須恵器甕が完形品で出土しており、溝状遺構内から須恵器・土師器が数多く出土している。これらの土器からみて、この第２次発掘調査地は５世紀後半の遺構のみ検出されている。

第３次発掘調査地区は、第２次発掘調査地区と幅約30メートルの谷を挟んだ北側に位置する畑地であった。
表土・旧耕土・床土及び褐色砂質土層の堆積があり、これらを除去・削平した後に、近世の溜池状遺構・溝状遺構、中世の建物跡・落ち込み状遺構、古墳時代の大溝・井戸・土壙状遺構が検出された。検出された遺構を簡単に説明しておきますと、溝状遺構は東西に走

行する溝５条、南北に走行する溝５条が確認され各溝は互いに直交し連絡されている。これらの溝のうち調査地東端において南北に走行する１条は長さ約29.5メートルで、他の溝は４～15メートルの規模であった。又、調査地の北限にあった溜池と推定される遺構は、長径は検出された部分で12メートル、深さ0.8メートル、底部は殆んど平坦で隅丸方形を呈している。堆積土内から多量の植物性遺物とともに古墳時代の土師器・近世の陶磁器類の破片が含まれていた。



第１図　岡山南遺跡調査地位置図(1/2500)

溜池状遺構及び溝状遺構の位置と形状からみて、耕作地に関係するものと考えられる。

調査地区全域において掘立柱建物跡が検出している。検出した柱穴は径約20～40センチメートルで、深さ20～50センチメートルのものであった。柱穴内からの出土遺物としては、銅銭「乾元大宝」(958年) をはじめ、瓦器椀・土師皿・羽釜等で建物の時期として13世紀代の瓦器椀及び土師皿・羽釜が出土することからこの時期とみることができる。

この建物跡の下層から延長約35メートル、幅約2～2.5メートル、深さ約1～1.2メートルのU字状をした大溝が調査地区中央部に逆S字の形で検出した。溝内水流は地形と高底差からみて南から北へ向って流れていたもので大溝の肩部から古墳時代後期（6世紀初頭）の大甕が出土し、大溝の最下層の礫層から円筒埴輪・5本の堅魚木のもつ切妻造家形埴輪・朝顔形埴輪・動物形埴輪・蓋形埴輪とともに小形丸底土器・手捏ね土器などが多数出土した。これらの古墳時代中期の埴輪や土器類に混って、縄文時代の石鏃・磨製石斧・縄文式土器や旧石器時代の木葉状尖頭器も出土したことから、第1次調査において古墳時代からの複合遺跡と知られていたが、旧石器時代及び縄文時代を含めた複合遺跡であることが判明した。

第4次発掘調査は昭和51年11月に府道新設バイパスに大阪瓦斯天然ガス管埋設工事に伴う調査を第3次調査地の北端に既設している市道忍ヶ丘駅前線の調査を実施した際、第3次発掘調査で検出した大溝が府道と市道の接合部において90度に曲り西流していることが判明した。

大溝内からの出土遺物として、円筒埴輪・小形丸底土器に混り木製下駄が出土している。

第5次発掘調査は、昭和56年2月から4月にかけて、第3次発掘調査の西側隣接地において、四條畷市開発公社の委託を受けて実施したもので、鎌倉時代末から室町時代にかけての掘立柱建物跡や平安時代の板枠井戸1基、古墳時代中期の集落跡を調査した。

特に井戸内下層から土師質鍋・甕とともに黒色土器椀2点が出土しており、黒色土器底部に「田内急」と墨書された土器が出土した。他に古墳時代中期の掘立柱建物跡が検出し、遺構面から数多くの円筒埴輪・蓋形埴輪が出土した。

今回の調査は第6次調査として府道バイパスの東隣接地の調査を実施したもので、第3次発掘調査において検出されている大溝遺構が今回の調査地区に続くことが明らかであった。土地所有者の岡野昌三氏から宅地建設の申請が出されたことによって、国庫補助金事業として全面発掘調査を実施したものである。

Ⅱ 遺跡の位置と歴史的環境

岡山南遺跡は大阪府四條畷市岡山に所在する。四條畷市は大阪府の東北部に位置し、東部は山間部を経て奈良県に接しており、西は寝屋川市、南は大東市、北部は交野市に隣接する東経135°38′北緯34°44′にある。地勢の東半分は生駒山系支派の山地となり、主として第3期層花崗岩によって形成された地質である。北部平坦地は、これら山地から流出された砂礫による沖積層となっている。

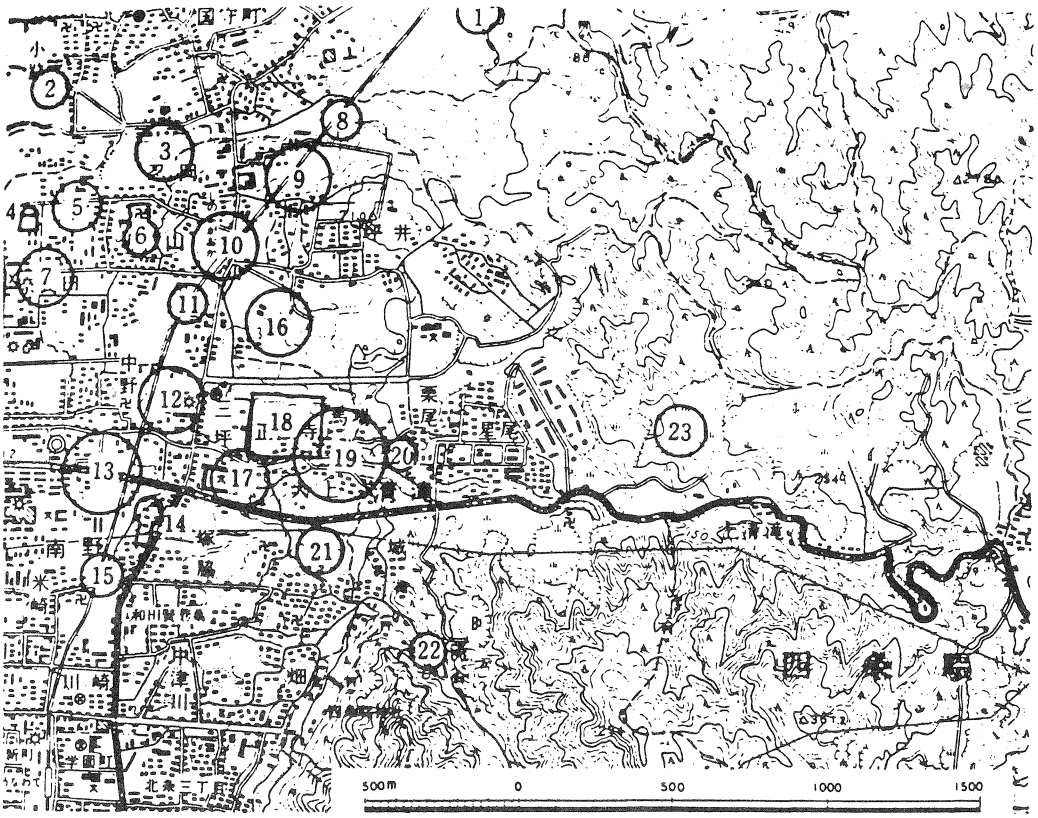
四條畷市のほぼ中央部を南北に通じる東高野街道沿いには、中世の掘立柱建物跡・井戸等の遺構が存在し、又、東西に通じる清滝街道沿いには、中世の清滝・逢阪千軒と呼ばれた中世村落として栄えていた。このように陸路交通の要地として重要な位置を占めていたことは、原始・古代を通じて同様、文化的先進地域の様相を呈し、多くの遺跡の存在が知られている。

当遺跡は生駒山系の西側斜面から派生する洪積層の海抜約25mの丘陵地形を利用して立地している。東の生駒山系から流出する水は讃良川・清滝川・権現川の3河川によって寝屋川を経て大阪湾に注いでいる。

今回の調査地は讃良川の左岸と清滝川の右岸のほぼ中間に位置する所から発見されている。

生駒山系の西側斜面は、生駒山から飯盛山をへて交野へ、そして枚方台地へと続いており、北端は八幡丘陵から南は南野丘陵までの淀川左岸に広がる広大な丘陵・段丘がある。この枚方台地は大きく北から船橋川・穂谷川・天野川・寝屋川・讃良川・清滝川・権現川の中小河川によって開かれたところである。

最近になって旧石器時代の遺跡発見例が数多く認められるようになった。枚方台地の旧石器時代遺跡としては、国府期のナイフ形石器・有舌尖頭器・石核・翼状剝片が出土した枚方市楠葉東遺跡、現在関西外国語大学テニスコートになっている小倉東遺跡から舟底形石器が出土し、交北城の山遺跡から国府型ナイフ形石器、田ノ口山遺跡から小型舟底形石器、星ヶ丘西遺跡から国府型ナイフ形石器・舟底形石器、藤阪南遺跡から木葉状尖頭器、藤阪宮山遺跡から石核・剝片・国府型ナイフ形石器・刃器、津田三ツ池遺跡から国府型ナイフ形石器・掻器・槌石・剝片・石核、藤田土井山遺跡から木葉状尖頭器、鷹塚山遺跡からスクレーパが出土している。交野市においては、神宮寺遺跡から握斧・国府型ナイフ形石器・有舌尖頭器、寝屋川市においては、太秦遺跡でナイフ形石器、高宮遺跡でナイフ形石器、打上遺跡でナイフ形石器、最後に四條畷市においては、更良岡山遺跡で大形礫器・国府型ナイフ形石器・削器・彫器・舟底形石器・チョッパー・細石器、忍ヵ丘駅前遺跡でナイフ形石器・忍陵遺跡からナイフ形石器、南山下遺跡から有舌尖頭器、岡山南遺跡から



第２図　岡山南遺跡周辺地形遺跡分布図

1．打上遺跡	8．国守遺跡	16．**岡山南遺跡**
2．小路遺跡	9．坪井遺跡	17．四條畷小学校内遺跡
3．讃良川遺跡・讃良寺跡 更良岡山古墳群	10．忍ヶ丘駅前遺跡	18．正法寺跡
	11．南山下遺跡	19．清滝古墳群
4．四條畷市銅鐸出土地	12．奈良井遺跡	20．国中遺跡
5．北口遺跡	13．中野遺跡	21．木間遺跡
6．忍ヶ岡古墳	14．墓の堂古墳	22．龍尾寺跡
7．奈良田遺跡	15．南野遺跡	23．千畳敷遺跡

木葉状尖頭器、田原遺跡からナイフ形石器がそれぞれ出土している。枚方台地周辺において旧石器が出土した遺跡は現在のところ20遺跡であり旧石器文化研究上きわめて重要な位置をしめている。

縄文時代には米粒文・山形文を施した押型文土器を特徴とする土器が出土する交野市神宮寺遺跡・四條畷市田原遺跡・東大阪市神並遺跡が発掘調査で発見されている。又、枚方

市穂谷遺跡・大東市寺川堂山においても早期の土器が出土している。

前期には寝屋川市高宮遺跡において出土した縄文式土器は薄手で前期の可能性が出てきている。

中期には渦巻文や半截竹管文をもつ船元式土器を出土する四條畷市南山下遺跡・砂遺跡、交野市星田旭遺跡があり、後期・晩期にはほぼ完形の高杯形土器・深鉢形土器・注口土器・土偶・石器が数多く出土した更良岡山遺跡、清滝古墳群においても石鏃・深鉢形土器が出土する。

枚方市交北城の山遺跡において滋賀里式系の深鉢形土器を転用した埋甕遺構が発見されている。

弥生時代については、四條畷市田原遺跡において畿内第Ⅰ様式新の壺が出土した。
又、大東市中垣内遺跡より北については現在のところ前期の土器が出土しておらないが、四條畷市砂及び雁屋地区の低地の調査において今後発見され古代河内湖沿岸の弥生文化空白部分を埋める資料が発見されると思われる。

中期初頭の畿内第Ⅱ様式の時期に出現する高地性集落の寝屋川市太秦遺跡や第Ⅲ様式～第Ⅳ様式に認められる直径11.5mの巨大な竪穴式住居跡をもつ田ノ口山遺跡、交北城の山遺跡で第Ⅱ様式から始まる方形周溝墓42基・竪穴式住居跡8棟・土壙・高床式建物跡が検出された場所は穂谷川水系沿いに立地している。

後期の第Ⅴ様式になると枚方市・交野市・寝屋川市の淀川左岸地域においては数多く点在する。代表的なものとしては、小型仿製鏡や分銅形土製品が出土した鷹塚山遺跡、六角形の竪穴式住居跡が発見された山之上天堂遺跡、鹿の絵の線刻した土器が出土した藤田山遺跡、住居と墓地をV字溝において分離した星ヶ丘西遺跡、一棟の竪穴式住居跡から鉄鏃を含む53個の鉄器片が出土した星ヶ丘遺跡があげられる。

古墳時代について見ると、眼下に淀川を見下す水運との関係を考えなければならず、又8面の銅鏡を出土した万年寺山古墳、直径25mの円墳と考えられ画文帯環状乳神獣鏡1面・銅鏃6本・鏃形石製品2個他を出土した藤田山古墳、粘土槨内から硬玉製勾玉・ガラス製小玉・碧玉製管玉・鉄剣・刀子を出土した交野市妙見山古墳、全長約80mの前方後円墳で後円部に長さ約6.3m、幅約1mの竪穴式石室を今なお見ることのできる忍岡古墳がある。

交野市の森古墳群から前方後円墳と円墳を含む8基の前期古墳群が確認されており、眼下に巴形銅器・筒形銅器を出した交野車塚古墳、中期になると枚方市禁野車塚古墳、牧野車塚古墳、四條畷市墓の堂古墳がある。後期になると生駒山系西麓に数多く分布しており、特に大東市堂山古墳群・四條畷市清滝古墳群・更良岡山古墳群・交野市寺古墳群・倉治古墳群・枚方市中宮古墳群・臼雉塚・比丘尼塚・北河内最大の横穴式石室をもつ寝屋川市寝屋古墳、終末期には国史跡指定されている石ノ宝殿古墳がよく知られている。

古墳時代の集落跡の発見は、四條畷市が大半を占めている。四條畷市岡山南遺跡の大溝内から切妻造りの家形埴輪に5個の堅魚木をつけたものや、円筒埴輪・蓋形埴輪・動物形埴輪とともに木製下駄も出土している。中野遺跡においては5世紀後半の製塩土器や最古形式の須恵器とともに勾玉・臼玉・紡錘車・木製剣が多量の土器とともに出土している。隣接地の奈良井遺跡には実際に製塩作業を行った石敷製塩炉及び1辺約40mの方形周溝遺構の祭祀場が検出し、周溝内から多量の土器とともに手捏ね土器・人形土製品・動物形土製品・滑石製品がそれぞれ一括で出土している。又同一溝内から小型の蒙古系馬が埋葬されていた。古代から中世にかけての遺跡は各市において数多く知られている。

Ⅲ 調査概要報告

今回の調査地点は、四條畷市岡山238—1番地で、忍ヶ岡丘陵のほぼ中央部に位置し、調査対象地は昭和50年頃まで畑地であった。

調査は、昭和50年10月府道枚方・富田林・泉佐野線新設バイパス予定地内の遺跡の範囲及び遺構の保存状態を正確に把握するための第1次発掘調査でトレンチを設定した際、F—06トレンチで第1層耕土、第2層床土、第3層褐色砂質土、第4層褐色砂層となっており、第3層からの遺物として、瓦器椀、土師質皿が出土している。もう1ケ所のF—08トレンチで第3層からの遺物として、F—06トレンチ同様に瓦器椀・土師質皿、第4層からは土師器・須恵器が出土した。

区画設定は、昭和51年7月の調査において、道路敷幅（東西15m）の中心線をFラインと設定し、東へGライン・Hラインと10m区画で横軸を基本設定した。南北・縦軸については、調査地区北端の市道忍ヶ丘駅前線の中心地点を算用数字の04と基準設定をし、南へ10m毎に05・06・07……20をあてて区画を設定した。それ故1区画は100 m^2の面積を有する。

A. 層　序

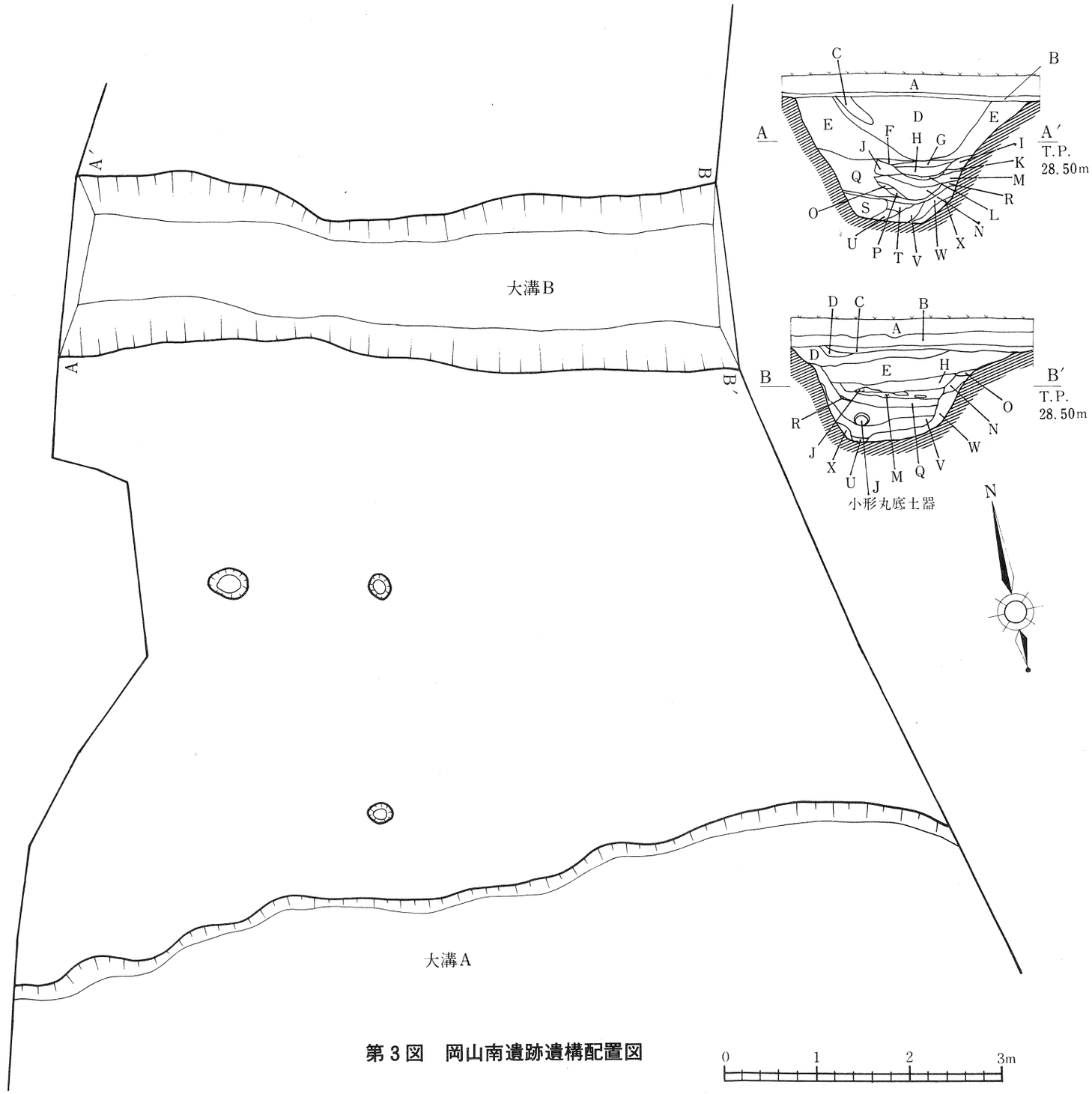
調査地のGラインの基本層序は、上から第Ⅰ層（耕土）、第Ⅱ層（床土）、第Ⅲ層（褐色砂質土）、第Ⅳ層（褐色砂層）となる。各層は北から南へ、東から西へと傾斜し特に遺構ベース面においては約10cmの比高差が認められた。

第Ⅰ層　耕土。厚さ約16cm。

第Ⅱ層　床土。ほぼ南北水平に床土が置かれている。

第Ⅲ層　厚さ約5～10cmで全域に認められる。瓦器椀・土師質小皿が出土しており鎌倉時代末～室町時代の包含層である。

第Ⅳ層　厚さ約10～20cmで北側において認められるが南側の大溝B検出地では認められない。遺構のベース面を構成している。この第Ⅳ層において大溝Bの上面が一部削平されており、この層内から瓦器椀・土師質小皿・須恵器・土師器がそれぞれ出土している。



大溝B　断面層位A－A′　B－B′

A　耕土
B　床土
C　淡褐色砂質土層
D　黄褐色粘質混り砂質土層
E　褐色砂質土層
F　淡灰色細砂層
G　淡黄褐色砂層
H　濃灰色砂質土層
I　白褐色砂層
J　灰白色砂質土層
K　灰色粘土層
L　赤褐色砂層
M　暗灰色粘土層
N　明灰色粘土層
O　灰色細砂層
P　明灰色礫混り砂層
Q　淡黄褐色混り暗褐色粘質土層
R　濃灰色粘土混り細砂層
S　黄色混り暗褐色粘土層
T　黄褐色礫層
U　灰色砂層
V　暗灰色粘土層（植物含）
W　濃灰色砂混り粘土層
X　灰色砂層

第3図　岡山南遺跡遺構配置図

B．遺　構

今回の調査において検出された主たる遺構には大溝A・大溝B・掘立柱建物跡などがある。

このうち掘立柱建物跡のpitが伴出する遺物や過去の隣接地調査結果から鎌倉時代末から室町時代初頭のものであり、次に大溝Bは古墳時代中期に掘られ後期に大溝内がほぼ完全に堆積されている。最後に大溝Aは、縄文時代晩期の土器とともに石器類が出土していることから、この時期に比定されるが、大溝Aの堆積土上面において平安時代の土器があり、この時期に削平していることは事実である。

a　大溝A

調査地の南端H-07地区に検出された。調査地区内での延長約10m、深さ約25～40cm、幅については南側肩部が平安時代において削平されたため計測不可能であった。しかし、昭和51年度の第3次発掘調査地区で検出した大溝Aの続きであり、第3次においては、長さ約13m、幅約2mを計測しており、ほぼ同様であろう。

第3次調査地区と合わせて大溝Aの東西方向全長は約23m以上であり、ほぼH-07地区は東西方向に蛇行しながらG-08地区で約90°北へ折れ曲り、またF-08ポイントで90°南へ折れ、谷斜面によって切断されている。東から蛇行しながら南への水流過程があったものと見られる。

溝内堆積土層は、第1層褐色砂質土、第2層淡褐色小礫混り層である。第1層からの出土遺物としては、黒色土器（第9図－32～34）が出土しているが、第2層内からは、縄文土器及び石鏃、サヌカイト片が出土する縄文時代晩期に使われた大溝A遺構である。

縄文土器はローリングを受けておらないが、文様等は磨耗によって明らかでないものがある。土器形式からみて縄文時代晩期の滋賀里Ⅲ式土器である。今回の大溝A内からの縄文土器は破片で174点・石鏃3点・剥片・石核あわせて39点が大溝A内の縄文時代関係遺物の点数である。

b　大溝B

調査地のほぼ中央部のH-06・H-07地区に検出した。調査地区内での規模は延長約7m、幅東部の上段で2m、下段で1.1mを測る。断面はU字形状を呈している。

遺構肩部の標高は28.90mで深さ約1mを測る。又、西部の上段は1.9m、下段で0.95mで全体に東から西に傾斜している。底面での東端と西端との比高差は約30cmを測る。

堆積土層は、西壁で第1層淡褐色砂質土、第2層黄褐色粘質混り砂質土、第3層暗褐色砂質土、第4層淡灰色細砂、第5層淡黄褐色砂、第6層濃灰色砂質土、第7層白褐色砂、第8層灰白色砂質土、第9層灰色粘土、第10層赤褐色砂、第11層暗灰色粘土、第12層明灰色

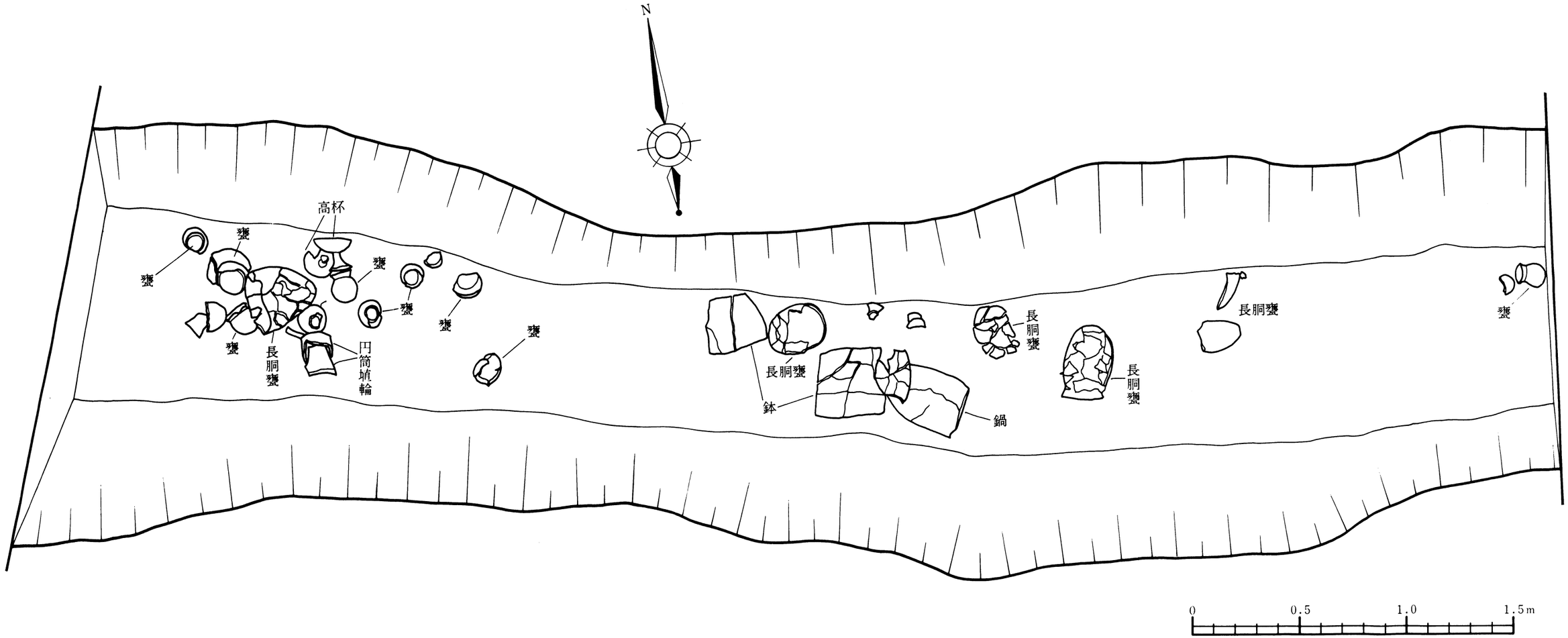
粘土、第13層灰色細砂層、第14層明灰色礫混り砂、第15層淡黄褐色混り暗褐色粘質土、第16層濃灰色粘土混り細砂、第17層黄色混り暗褐色粘土、第18層黄褐色礫、第19層灰色砂、第20層暗灰色粘土（植物含）、第21層濃灰色砂混り粘土、第22層灰色砂である。また東壁断面の堆積層は次のとおりである。

第１層淡褐色砂質土、第２層黄褐色砂質土、第３層褐色砂質土、第４層白褐色砂、第５層灰色細砂、第６層濃灰色砂質土、第７層灰白色砂質土、第８層明灰色粘土、第９層淡黄褐色混り暗褐色粘質土、第10層灰色砂、第11層暗灰色粘土、第12層灰色砂、第13層濃灰色砂混り粘土、第14層灰色砂である。

出土遺物は第19層以下より多量の土師器が出土している。特に灰色砂層内からは甕形土器（第６図－１～２、４～８、10　や、手捏ね土器（第６図－12～15）、把手付埦形土器（第６図－16）、埦（第６図－17～18）、壺（第６図－19）、高杯（第６図－20～22）、長胴甕（第８図23～26）、甕（第９図－39）、大鉢（第９図－40）が、一括資料である。

甕は口径約11cm内外のものが、岡山南遺跡大溝Ｂ内で、最も多く出土しているタイプである。その土器は第６図の１）、２）、４）、６）、７）、８）で平均口径11.6cm、平均胴径13.45cm、平均器高11.96cmを計る。又同一層内から、古式須恵器高杯（第９図－36）や口径34.2cm、器高39.3cm、胴径32.3cmの土師器の土器（第９図－40）は、四條畷市周辺地域で発見されていない器形でありここでは、一応土師器大鉢としておく。この土器は直線的にやや外反しながら上方にのび、口縁部に至るが、口縁端部はやや内傾しながら尖がるもので、輪積みによる接合痕が内面に明瞭に残されており、外面は全体に縦方向の刷毛目を施している。底部外面がヘラによる削りが行なわれ、底部が欠失しており不明であるが、実測図で復元したように丸底ではなく、平底に近いものと考えられる。底部欠失以外は完形に近いものであり、把手を付けた痕跡はなく、今後各地の遺跡で同種の土器が出土することにより明らかになる一資料であろう。

手捏ね土器はすべてが埦形土器のミニチュアである。今回の調査地区で実測図にあげた４点が出土している。第３次調査地区内の大溝Ｂ内から同種の手捏ね土器は３点が知られており、現在までに７点が確認されている。このような手捏ね土器は、岡山南遺跡の南西約600mに所在する、四條畷市立市民総合センター建設に伴う事前調査において、古墳時代中期の祭祀遺構の発掘によって、手捏ね土器の埦形・壺形・甕形・鉢形等のセットになる土器が多数出土している。最後に大溝Ｂ遺構の第３次発掘調査、第４次発掘調査と今回の第６次発掘調査の３回にわたる調査全体から少し簡単にのべると、大溝Ｂの遺構は、東西に舌状にのびる丘陵のほぼ中央部を東西に蛇行しながら約20m西行してＦ-07ポイントに入る地点でほぼ直角に近い角度で北へ向い、Ｆ-05までほぼ同一の溝幅をもちながら約30mほど進んだＦ-04地区内で更に、ほぼ直角に近い角度で西行していることが明らかであった。



第4図　岡山南遺跡大溝B内土器出土平面実測図

次に現存する大溝肩部の標高は、東端のG-07ポイントでは標高約28.90m、F-07ポイントでは標高約28.70mで、約30mの距離において、約20cmの肩部高低差が認められる。又F-05ポイントにおいては、標高28.40mで約25mの北方への距離において、約30cm低くなることがわかる。すなわち遺構検出上流のG-07と下流のF-05での肩部高低差は約50cmを測る。同様に大溝Bの底部についてみてみると、G-07で標高約27.76m、F-07で標高約27.32m、F-05で標高27.28mで上流のG-07と下流のF-05の底部高低差は約50cmを測り、あきらかに現地形に従がう状況で、大溝Bを掘られ流路として使用されている。
溝内に投げ込まれていた土器及び埴輪類については、まとめにおいて遺物出土地点実測図について説明することにしてここでは省略しておきたい。
他に最下層の灰色砂層から石鏃、石錐が出土している。

c 掘立柱建物跡

H-07地区において3ヶ所のPitを確認した。各Pit内から瓦器埦及び土師質小皿の細片が数点ずつ出土しており、瓦器埦の形式編年からみて13世紀のものであった。

Ⅳ 出土遺物

概観

2基の大溝・掘立柱建物跡遺構に伴って出土した遺物は、土器・石器・埴輪からなる。土器は、大溝Aから縄文式土器のほか平安時代から室町時代の黒色土器・土師質小皿の土器類が出土していた。大半の土器は大溝B内からのもので投供された状況であることから、遺物は比較的短期間のうちに堆積したものである。

A．大溝A内出土遺物

土器

大溝A内からの出土遺物としては、縄文式土器片174点、(第5図・図版15・16）石器及び剥片（図版15）あわせて49点、黒色土器（第9図－32～34・図版14）、灰釉皿（第9図－31・図版14）が出土している。

大溝Aの使用された時期の遺物として縄文土器及び石器でみることができる。縄文土器片で器形のわかるものを少し説明しますと、深鉢・浅鉢の2種類であり、出土土器の約90％以上が滋賀里Ⅲb式で一部に船橋式深鉢も出土している。

滋賀里Ⅲb式の深鉢は口径約30cm前後で長い口縁部はわずかに外反するもので山内清男氏が「縄文土器の技法」「世界陶磁全集」1で指摘されているように粘土ひもを積み上げて成形されているものである。深鉢内面を観察すると、粘土ひもの幅は1.5～2cmで接合面はヘラ状のもので平担面をつくり沈線状の凹をつけている。

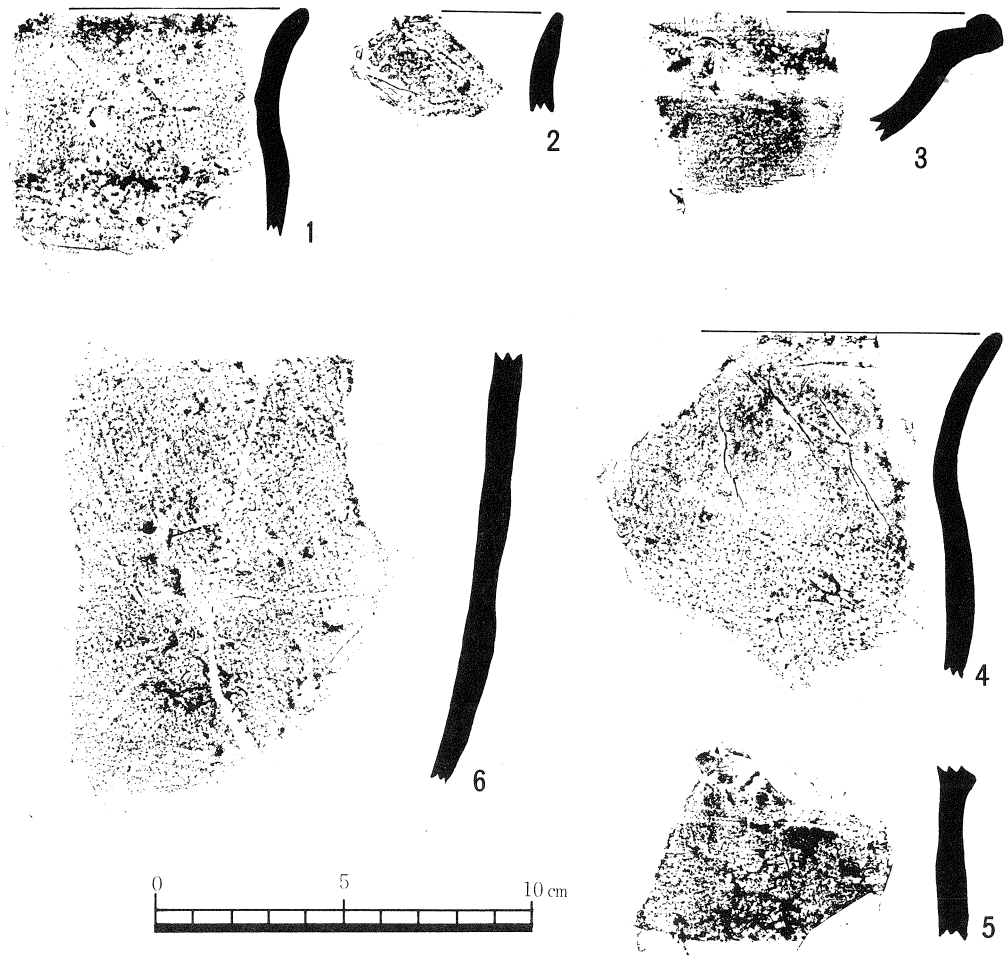
次に胎土及び色調では、灰褐色や黒褐色で1～3mmの花崗岩・2mm前後の長石・角閃石雲母が多く含まれている。

深鉢に認められる調整手法には、二枚貝調整・削り調整・ナデ調整などがある。内面の調整はヘラ状のものによって水平方向にナデ調整されている。又、二枚貝調整されているものにも調整後にナデ調整を施したものがあり、内面の調整は外面の調整にくらべて丁寧な仕上げをしている。

浅鉢（第5図－3・図版16）1点が出土している。形態は滋賀里Ⅱ式の浅鉢B_1と同じであるが体部が浅くなっているもので底部は欠失しているが丸底である。内外面ともに丹念な磨きを行い黒色磨研土器である。

石器

岡山南遺跡の大溝Aから出土した石器は、石鏃3点・剥片・石核あわせて39点である。すべてが遺構内最下層の淡褐色小礫混り層から出土したものである。石鏃は基部の形状、茎の有無を基準にして分類しているが、本遺跡から出土する石鏃はすべて基辺が凹む凹基無



第５図　縄文土器拓影

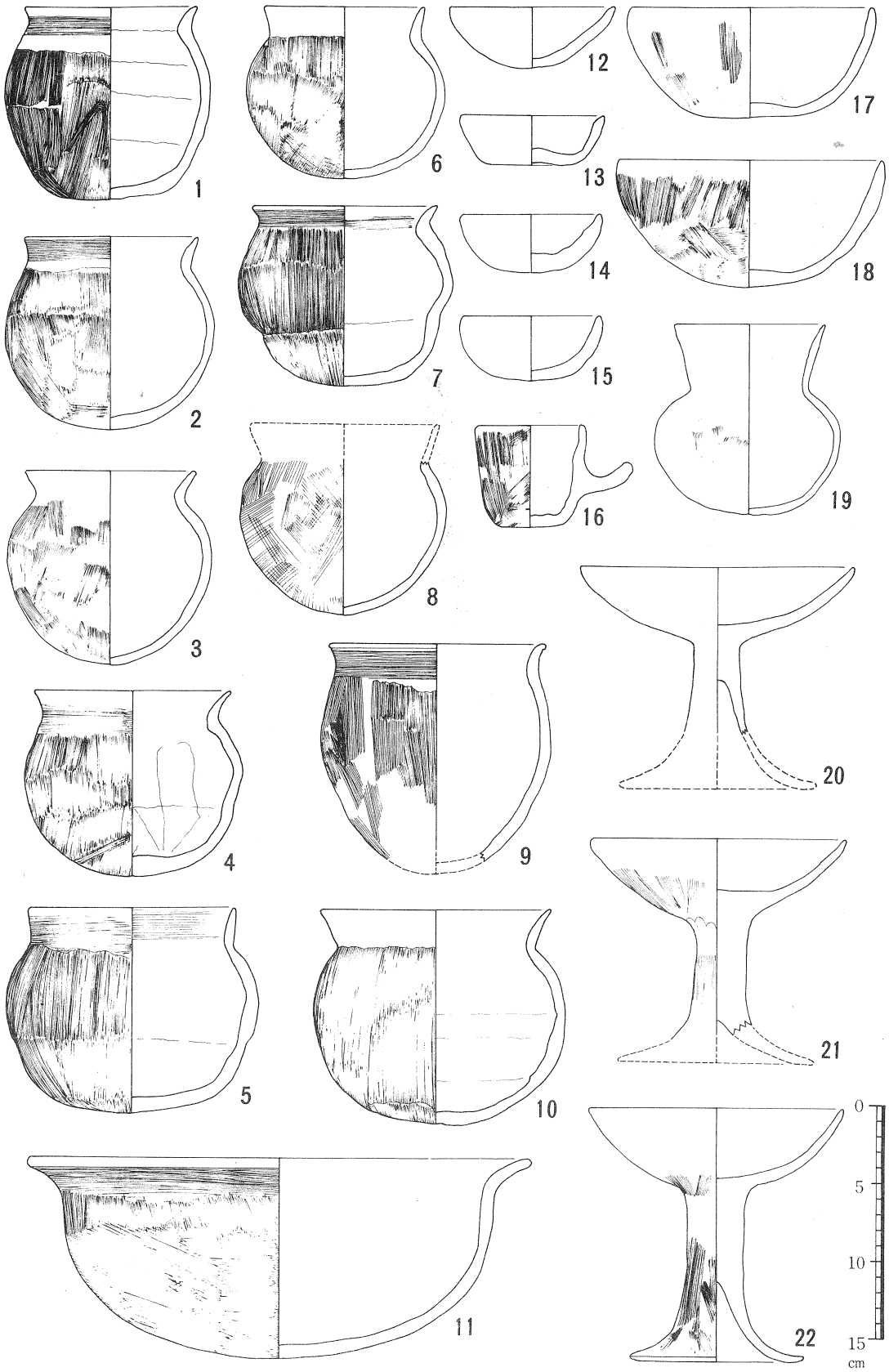
茎式のものばかりであり、石鏃の最大幅が基辺にあるものである。

法量は、長さ25mm、幅18.5mm、厚さ3.5mmであるものと、長さ27mm、幅24mm（推定）、厚さ３mmである。

剥片・石核は長さ21mm～46.5mm、幅15mm～55mm、厚さ5.5mm～17mmで両面または一部に原礫面を残す。

大溝Ａ内堆積土の第１層褐色砂質土層から灰釉皿（第９図－31・図版14）と黒色土器（第９図－32～34・図版14）が出土している。

灰釉皿は口縁部が上外方にのび端部は丸く浅くおわる。高台は体部との境より八の字形に張り出してつけており、底部に糸切り痕跡が明瞭にのこっており、焼成は良好で堅緻である。また黒色土器３点が出土している。32）は口径14cm、器高5.2cm、高台径7.3cmを測るもので口縁部は外上方にのび端部は丸くとじるもので、底部は平担に近く内弯ぎみに立ち



第6図　出土土器実測図・Ⅰ

あがり口縁部に至る。高台は断面三角形で体部には明瞭に成形時の指圧痕がのこっている。高台の接合痕が非常によくわかる資料で粘土紐を指で押えながら貼り付け後にヨコナデを施している。色調は外面は明赤褐色であるのに対し、内面は黒色で一般に言われている内黒の土器である。33）は口径15.8cm、器高6.3cm、高台径7.4cmを測るもので口縁部は直線的に外反する体部で端部は尖り気味のもので高台は台形を呈する。高台の付け方は32）と同様であるが色調は内外面とも黒色である。34）は口径13.6cm、器高5.7cm、高台径7.3cmを測るもので口縁内部に1条の沈線を施すもので高台は三角形の断面を呈し、体部外面に整形時の指圧瘍が明瞭に残っている。色調は外面が明赤褐色、内面は黒色で32）同様一般に言われている内黒の土器である。

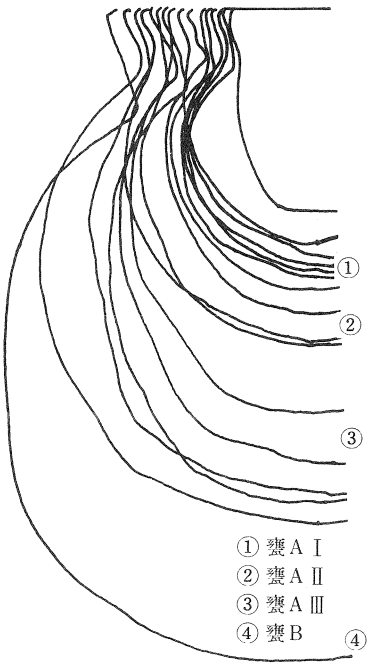
B．大溝B内出土遺物

土器

甕（第6図－1～10・図版8・9）大溝B内からの出土遺物の中で最も量的に多い器形の土器が甕で、形態として法量(第7図)によって4種類に分けることができるが、その大小を問わず口縁部と底部のつくりに当地域の特徴があらわれている。

口縁部はやや外弯気味にたちあがり、特に大型甕において顕著に認められる。

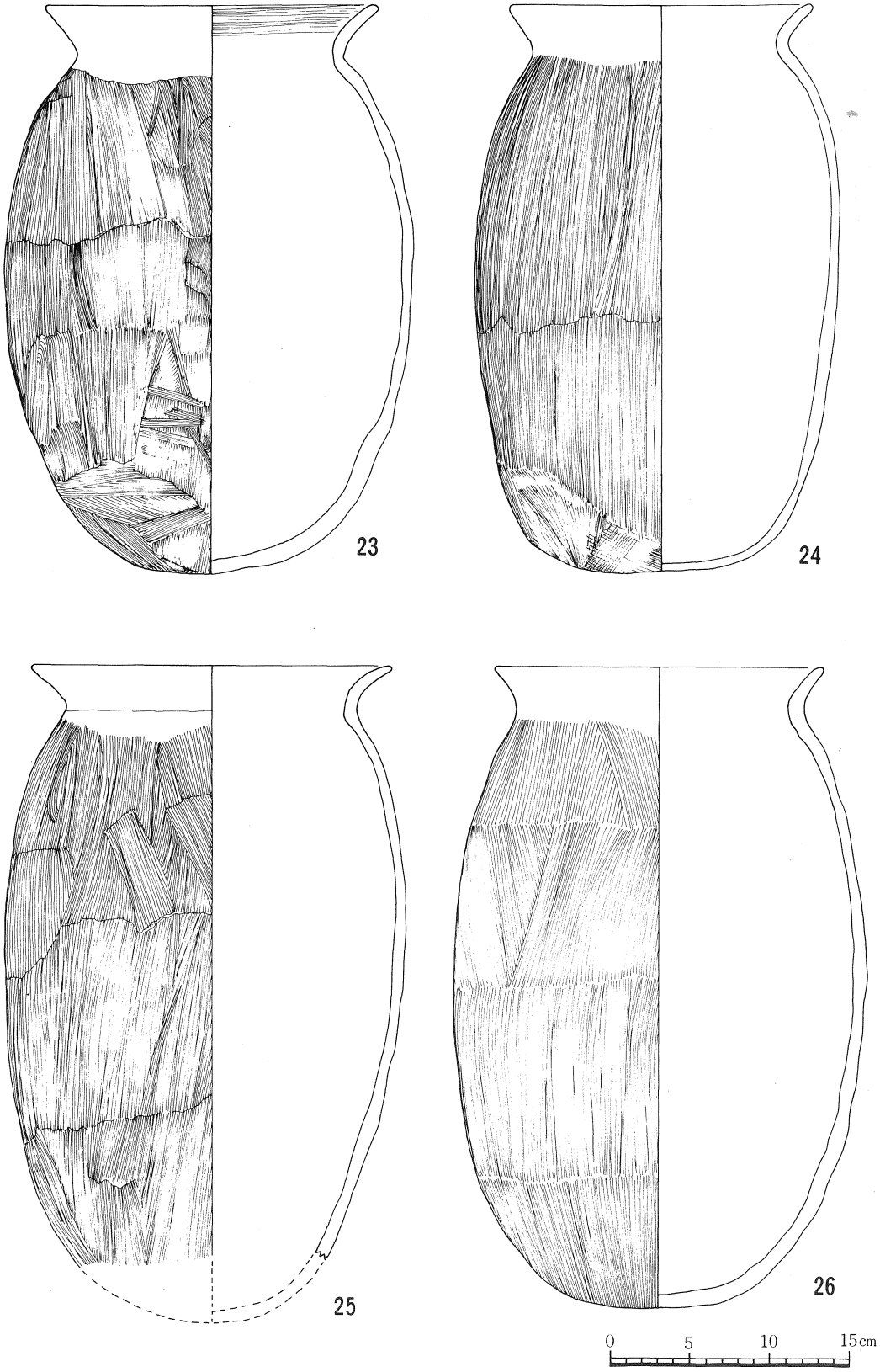
口縁端部のとじ方には大きく2種類のタイプに分かれ、一つは端部をつまみあげるものと、一つは端部上端面が内傾して平らにおわるものである。また最も量的に多い小型甕は外反する口縁部をもち、口縁端部は丸くとじるものである。この大小を問わず体部中位に最大径をもって底部全体に重心をもたすため、型によって貼り付けた後、外面に刷毛目を施し整形している。内面にはつなぎ目の痕跡が明瞭に認められる。このような例は東大阪市鬼塚遺跡でも発見されている。



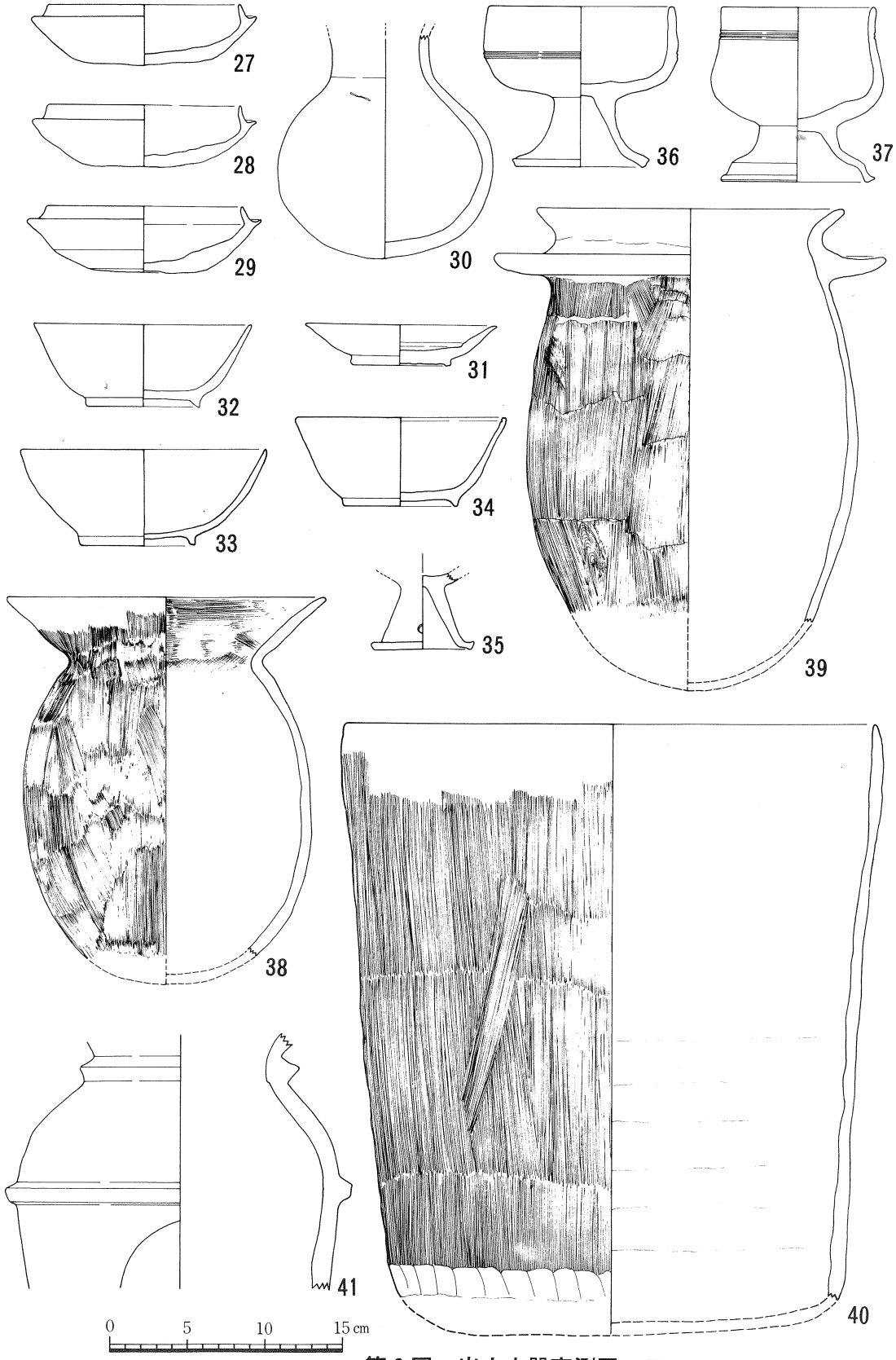
第7図　甕法量

鍋（第6図－11・図版12）　口径32.4cm、胴径27.5cm、器高12.9cmで口縁部は「く」の字形に外反して端部で丸くとじるもので内外面ともナデ調整している。底部はやや平らで外面の底部と基部との中間に段をもち、口縁部より段までが縦方向の刷毛目を施し、段から下は乱方向の刷毛目を施している。

手捏ね土器（第6図－12～15）口径8.7～10.6cm、器高3.2～4.2cmの埦形土器のミニチ



第８図　出土土器実測図・Ⅱ



第９図　出土土器実測図・Ⅲ

ュアで大溝B内からこれまで出土した手捏ね土器と合わせて7点すべてが埦形で四條畷市内では奈良井遺跡祭祀遺構内から埦形2点、壺形3点、甕形10点、鉢形1点の合計16点が一括資料として出土している遺跡が南西約600mの位置にあり、又、岡山南遺跡の西約300mの南山下遺跡からも埦形3点、甕形4点も出土している。

把手付埦形土器（第6図－16・図版13）　口径6.5cm、器高6.5cmで口縁部は少し内弯しながら端部は薄く丸くとじるもので、体部中位に把手がつき、体部外面に刷毛目を施し、口縁部内外面ともにナデ調整を施している。第3次発掘調査の大溝B内から、口径10.3cm、器高11.3cmで同一形式の土器が出土している。胎土及び色調も同一のものであった。

土師器埦（第6図17～18・図版10）　口径15.3cm、器高7.1cm及び口径16.8cm、器高8.1cmの2点が出土している。前者のものは、口縁部が内弯しながら端部は内傾をもってとじている。体部に4条の粘土紐接合痕が認められる。又、後者は口縁部は少し内弯し端部は薄くとじる。体部は粘土紐接合痕が認められ、調整は両者とも外面に縦方向の刷毛目を施している。内面はヘラ削りの後ナデ調整を施している。

土師器壺（第6図－19・図版8）　口径9.7cm、器高12.2cm、口頸部高4.2cmで基部よりややまっすぐに上方にのびて長い口頸部である。最大径は胴部中位に有する丸底の球形器体で、外面は磨耗によってヘラ削り痕のみ少し残る。第3次調査においては口径10.5cm、器高16.7cm、口頸部高7.8cmの長頸壺1点が出土しており大溝B内の壺は2例だけである。

高杯（第6図－20～22・図版10）3点の高杯が出土しているが、法量が明らかなのは1点だけで22）は器高16.3cm、杯部高5.0cmを測る。脚柱部は上半で中実の脚部でほとんど脚柱部が広がらずに裾部に至ってから広がるものである。同様の高杯も第3次発掘調査において出土している。両者とも脚柱部をにぎりしめた痕跡があり、斜方向及び縦方向の刷毛目を施している。

長胴甕（第8図－23～26・図版11）　口径18.9～22.5cm、胴径22.7～25.9cm、器高35.2～40.0cmのもの4点が出土、第3次においても4点が出土している。第3次の調査においての長胴甕の出土状況は東から流れる大溝Bが北行に90度の角度で折れる場所に置かれた状況で出土したものと同型式のもの4例である。口縁部の外折する高さは個々に特徴が違っているが、刷毛目及びナデ調整は同一手法に基づいて行なわれている。

杯身（第9図－27～29・図版13）　大溝B内堆積土中位の第5層淡黄褐色砂層内から3点が出土している。土器の特徴は観察表に示したとおりである。時期は6世紀後半頃のものであり、この時期において大溝Bは流路としての使用はされていない。

須恵器長頸壺（第9図－30・図版13）　口頸部端部が欠失されているために口縁端部は不明確であるが、杯身と同一層内の出土であり6世紀後半の長頸壺とみられる。
最大径を中位にもち、頸部から胴部にかけてかなりふくらみをもつ丸底で底部調整は粗雑

である。

高杯（第９図－35～37・図版13）　35）は脚部のみ出土であり残存高は4.8cmと小型の高杯である。裾部に0.6cmの円孔3ヶ所を穿つ。36）は器高10.4cmの無蓋高杯で口縁部は垂直にのびる端部で体部中央に２条の沈線が施されている。脚部は下外方に開く裾部である。内外面共に回転ナデ調整で古式須恵器である。又、37）は器高11.3cmで口縁部は内傾したのち垂直にのび端部にいたる。器形は一般にブランデーグラスに似た高杯で調整は回転ナデ調整が残っている。

土師器甕（第９図－38～39・図版９・10）　38）は口径20.5cm、胴径18.5cm、器高25cm（推定）で口縁部は「く」の字形に外折し内反ぎみに外上方にのび長い口縁部で端部は丸くとじている。胴部の最大径は中位にもち、外面全体に刷毛目が施されている。又、内面はナデ調整である。胴部から底部にかけて全体にススが付着している。

39）は口径19.7cm、器高約31cmで口縁部はゆるやかに外反して端部は方形ぎみにおさまる。口縁と胴部との間に鍔をつけた羽釜として使用されていたものであろう。

大鉢（第９図－40・図版12）　口径34.2cm、器高39.3cm、胴径32.3cmでほぼ垂直的にやや外反しながら上方にのびるもので、口縁端部はやや内傾して尖がり気味におわる。

底部外面近くに幅約２cm位のケズリ痕が残され、その場所から底部全体が欠失していたため底部の形状は不明であるが一応実測図では平底に近い状況で書いている。

体部外面全体に縦方向の刷毛目が施され、内面には輪づみ接合痕が明瞭に認められている。刷毛目の施し方は長胴甕によく似ており、把手を付けた痕跡がなく、今後土器運搬について問題が残る。内面はほぼ全面にわたりススが付着しており、この土器の中での煮沸具とみることはできない。

石器（図版15）

大溝Ｂ内から出土した石器は、石鏃２点、石錐１点、原石１点、剝片１点が灰色砂層から出土している。石鏃２点は凹基無茎式のもので長さ29.5mm、幅20.5mmと長さ25.5mm、幅15mmのものと、石錐１点、長さ24.5mm、最大幅19mmを測る。つまみをもつ石錐で、使用による磨滅の痕跡を残しておらない。又、幅105mm、長さ132mm、厚さ24mmのサヌカイト原石１点が出土している。片面は原礫面を残し、裏面は風化によって灰色を呈している。

V まとめ

今回の調査で発見された遺構は、縄文時代晩期の大溝Aと古墳時代中期～後期にかけての大溝B、鎌倉時代末頃の掘立柱建物跡が確認され、各遺構内から時代決定を行なう豊富な各種遺物が出土した。

とりわけ、今回の調査地は昭和51年7月から10月まで調査を行った府道枚方・富田林・泉佐野線新設バイパス予定地の第3次発掘調査を実施した旧畑地の東側残地であった。調査面積は東西10m×南北25mの約250 m^2の範囲であったが、第3次発掘調査において検出していた大溝A・大溝B・掘立柱建物跡・溝状遺構が今回の調査地区域内に各遺構が広がる可能性が明らかであった。

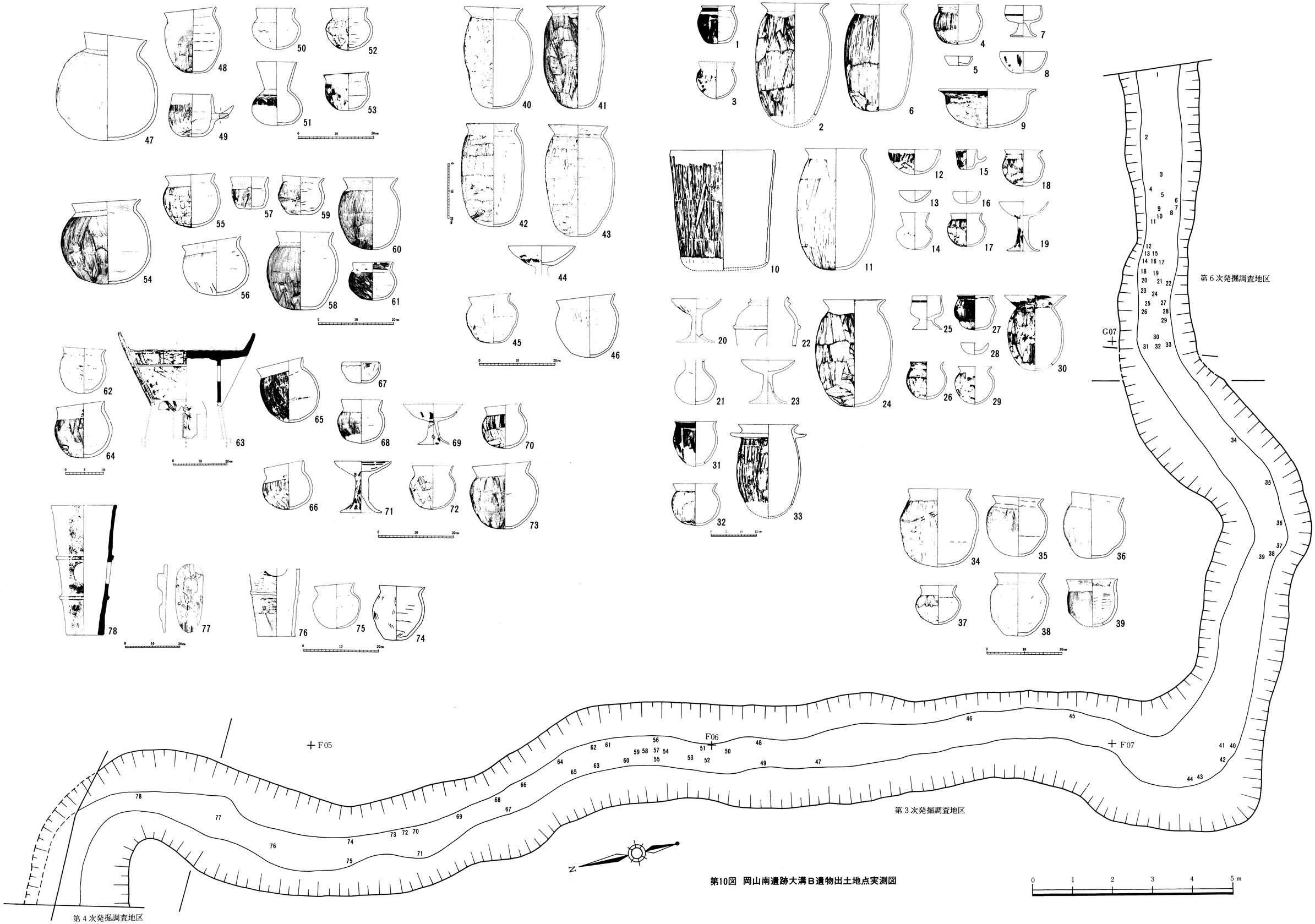
今回の調査区域内だけの遺構だけで各時期の集落を考えることは困難であるが、過去の5回にわたる調査と今回の調査をあわせて6次にわたる調査全体から少し補足しておきたい。

第1に岡山南遺跡に人類が住みついた最初の時期についてであるが、第3次発掘調査のF-07地区内大溝B内底から旧石器時代の長さ10.9cm、幅5.4cmのサヌカイト石材の木葉状尖頭器が出土している。しかし、この尖頭器以外の旧石器時代に比定される石器類については無しであるが、岡山南遺跡の北西約400mの讃良川川床遺跡から旧石器に比定されるナイフ形石器・ハンドアックス・チョッピングトール・細石器が出土した遺跡は著名である。また、忍岡古墳の盛土中からナイフ形石器が採集されている。

岡山南遺跡の西約300mの国鉄片町線複線化工事に伴う南山下遺跡発掘中に長さ11.0cm、幅3.2cmのサヌカイト石材の有舌尖頭器1本が古墳時代後期の溝内から完形で出土している。

忍ヶ丘駅を中心とする約400mの範囲には旧石器時代人が残した石器類が発掘及び採集品として多く知られる。

第2に第3次発掘調査で検出しながら時期が不明であった大溝Aや、大溝B及びPit内から出土する石器類との関係であるが、大溝A内からの出土遺物は中世の日常雑器類の出土であったために中世に掘られたものと1976年12月刊行した概要報告書で考えられていたが、今回の第6次発掘調査において大溝A内からの堆積層から中世の遺物と下層から初めて縄文時代晩期の土器が数多く出土している。第3次発掘調査で出土した石鏃5本・石錐1本・磨製石斧1本・敲石1個等の石器類は古墳時代中期の堆積層内や鎌倉時代末頃のPitの埋土内で、すべての石器は後世に掘られた遺構内からの出土品であったが、これらの石器の時期は土器編年からみて縄文時代晩期のもので今回検出した大溝Aの最下層の土器・石



第10図　岡山南遺跡大溝Ｂ遺物出土地点実測図

器と同一時期とみられる。

第3に大溝Bの掘られた時期及び遺構の性格の問題であるが、ここに第3次発掘調査での大溝Bと第4次発掘調査での大溝B、今回の調査区の大溝Bを図面上に継ぎ合わせたものに、また大溝B内から出土した遺物を地点ごとに記入して遺構内遺物配置（第10図）を試みた。以下少し述べておきたい。

大溝B内から出土した土器は小形丸底土器26点・甕16点・長胴甕8点・羽釜1点・壺2点・高杯6点・埦6点、把手付鉢形土器2点・須恵器高杯2点・埴輪2点・木製品5点、その他31点の計107点がほぼ完形品もしくは完形に復元された土器・木器であった。単に捨てられたと考えるには、あまりにも多く出土している。出土遺物からみて大溝が掘られた時期は5世紀中頃であり、その時期のものとして切妻造り家形埴輪があげられる。家形埴輪は高さ約42cm、床面積750cm^{2}で切妻部と四柱部が分離して作られた綴葺の切妻造りの家形埴輪である。切妻部は棟までの高さ約6.5cm、堅魚木が貼り付けられていた痕跡から5本が確認されている。大溝B最下層の灰色砂層内からの出土遺物が大半を占めており、これらの土器は古墳時代中期末の土器が最も多く、又、堆積土内から古墳時代後期の6世紀中頃の土器も出土する事から掘られた時期は5世紀中頃で5世紀後半頃には、この大溝B内に土器を投げ込まれる時期であり、又、堆積が始まるのは6世紀初め頃で完全に埋まるのは6世紀後半頃で約1世紀の間、何らかの形で使用されていたことは事実である。

大溝Bは延長約50m、幅約2～3.5m、深さ約1.0～1.2mのU字状をしており、逆S字形の遺構を検出したもので、流路は地形と溝底高低差からみて東から西へ流れてF-07ポイントで北へ直角に折れ曲り蛇行しながらF-05ポイント北側で又西へ直角に折れ曲る形で検出した大溝Bであった。

次に流路に従い遺物出土状況からみて少し説明しておきたい。

G-07ポイントより東側の今回の調査地内から小形丸底土器10点・甕1点・長胴甕4点・羽釜1点・壺1点・埦6点・把手付埦1点・鍋1点・土師高杯3点・須恵器高杯2点・大形鉢1点がそれぞれ出土している。

調査地中央部に出土した大形鉢を中心とする一群が土師器の各器種が揃ったセット関係で出土したのは良好な資料であった。第3次発掘調査地区内に入り、少し南側に曲がることによって溝幅が広くなったところには大形甕1点・中形甕4点・小形丸底土器1点の計6点からなるグループである。すべての土器の口縁は下流を向けて横たわる状況での出土であり、うち3点は横一列に置かれている状況であった。

次にF-07ポイントで折れ曲る左肩部下の位置に長胴甕4点・高杯1点、その他に動物埴輪の足部が出土しているグループである。長胴甕4点のうち2点は口縁部を上流に向けて他の2点は下流を向けて置かれた状況であった。

次にF-06ポイント周辺には大形甕3点・中形甕7点・小形丸底土器11点・高杯2点・壺1点・把手付埦1点・埦1点・家形埴輪1点の計27点からなるグループである。特に家形埴輪を中心にその周辺に甕類が特に多く出土しており、又加工木材が2点出土した間には長頸壺が正位の状況で出土していることと、㊺㊻との大形甕が南北に2点おかれ、その間に小形甕㊼を中央におき両側で挟み込む状況で口縁を下流に向けていたことは興味深い。第3次発掘調査地区北端と第4次発掘調査地区とが1グループとみることができる。このグループには木製品が多く認められるグループである。長さ24.4cm、幅9.5cmの左足用大人用下駄と長さ42.8cm、現存最大幅10.8cmの叩き板状木製品、方形に加工された板に方形の窪みをつけた加工木製品等を中心に小形甕と円筒埴輪6点からなるものである。

大溝B内から出土した埴輪は、円筒、朝顔形、家形、きぬがさ形、盾形、馬形があげられる。特に家形埴輪は小型のものであるが立派な主屋となる建物をあらわしている。

堅魚木を屋根にあげる家については「古事記」雄略天皇の条に以下のような記事がでている。天皇が山越えをして河内平野を見わたしたところ、堅魚木を棟にあげている家があった。天皇はその家は誰の家かとたずねると、志幾の大県主の家とわかった。「己が家が天皇の御舎に似て造れり」と怒り、その家を焼きはらわせようとした。という記事からみて、立派な堅魚木が棟にあげる建物は、相当の身分をもつ人物、すなわち地域の首長クラスの住居に限っていることがわかる。

以上のように多種多量の埴輪がどのような目的のためにこの大溝B内に用いられたものであるかの問題であるが、この遺跡は明らかに集落跡であり、南側丘陵及び大溝Bの西側は居住区域であることは、第2次及び第5次調査で明らかであった。すなわち居住区との区画のための溝との関係である可能性が、つよく認められている。

Ⅵ　掲載遺物観察表

甕

番号	法量 cm	個々の特徴	色調・胎土cm	備考(出土地・層位)
1	口径　11.0 胴径　13.3 器高　12.5	(口縁部)　基部でゆるやかに外弯しナデ調整が施され外上方へ短くのびる。 (胴部)　内面には、3条の粘土紐接合痕を残す。口縁基部から胴部全体にかけて縦方向に刷毛目があり底部は乱方向の刷毛目が施され、内外面共にナデ調整が施されている。	全体に灰黄褐色で内面はやや灰色気味で砂粒を少し含むが精良な粘土。 焼成も良好。 最大径部から底部にかけて加熱による12×8の淡赤色斑。	大溝B 灰色砂層
2	口径　11.2 胴径　13.4 器高　12.3	(口縁部)　基部でゆるやかに外弯し外上方へのびる。内外面共にナデ調整が施され肩との境に段をもつ。 (胴部)　最大径が中位に位置する球形の丸底土器で肩から縦方向に刷毛目があり底部は、乱方向の刷毛目を施す。内面は、ヘラ削りの後、ナデ調整が施されヘラ痕2本がある。	全体に赤茶褐色で胴部に7×9の黒色斑と10×8のススが付着。内面も赤茶褐色。砂粒を少し含むが精良な粘土。 焼成も良好。	大溝B 灰色砂層
3	口径　11.0 胴径　13.1 器高　12.5	(口縁部)　基部で外上方へ肥厚して短く開く。内外面共にナデ調整が施されている。 (胴部)　最大径を上位に有する器形で縦方向の細かい刷毛目が施されている。 底部と接合付近に指圧痕が強く残る。	赤褐色、最大径から底部にかけて加熱による8×6の淡赤色斑がある。	大溝B 褐色砂質土
4	口径　12.7 胴径　14.0	(口縁部)　基部で外弯し外上方へ肥厚して開き外反ぎみに端部	赤茶褐色っぽい、0.1程度の	大溝B 灰色砂層

4	器高　12.0	にいたる。 (胴部)　最大径を中位に有する。底部と胴部との接合に段をもつ丸底。器体に縦方向の刷毛目であるが、やや乱方向ぎみの刷毛目が施されている。 内・外面は胴部と底部の接合面に段をなし、内面は指圧痕を残す。	砂粒を少し含む精良な粘土。	
5	口径　13.4 胴径　16.3 器高　13.2	(口縁部)　基部でわずかに外弯し外上方へたち上がる。内面はナデ調整が施され基部の刷毛目は横方向に強く残っている。 (胴部)　最大径が中位に位置する球形で手づくねの底部との境に段をもつ、外面は縦方向の刷毛目だが中位以下はやや乱方向となる。内面はヘラ削りの後、ナデ調整が施されている。	灰黄褐色。 0.1～0.3の砂粒を含み軟質である。	大溝B 灰色砂層
6	口径　10.4 胴径　12.8 器高　11.1	(口縁部)　内上方に立ちあがった後、短くのび端部へいたる。内外面ともにナデ調整が施され基部に段をもつ。 (胴部)　最大径が中位に位置する球形で丸底を呈す。外面は肩より中位までは縦方向の細かい刷毛目で中位以外は乱方向の粗い刷毛目。内面はヘラ削りの後ナデ調整が施されており、2条の粘土紐接合痕が残っている。	黄褐色。 砂粒を少し含むが精良な粘土。 焼成も良好。	大溝B 灰色砂層
7	口径　12.0 胴径　13.9 器高　11.6	(口縁部)　基部で外弯し、ゆるやかではあるが凹凸をもち外上方へ開く短い口縁部。内外面共にナデ調整が施されている。 (胴部)　手づくねの底部が変形している為、全体が歪み、胴部	暗灰褐色。 精良な粘土焼成堅緻。	大溝B 灰色砂層

7		の間に接合痕がみられる。外面は肩から底部にかけて縦方向、底部は乱方向に刷毛目、内面はヘラ削り後、ナデ調整が施され粘土紐接合痕が残っている。		
8	口径　12.3 （推定） 胴径　13.3 器高　12.3 （推定）	（口縁部）　欠失する。 （胴部）　最大径を中位よりやや上にもつ球形で丸底。内外面共にナデ調整が施されているが外面は乱方向の刷毛目が施されており一部摩耗のため消されている。	全体に淡赤茶褐色。 砂粒を少し含みやや軟質。	大溝B 灰色砂層
9	口径　14.0 胴径　14.8 器高　14.8 （推定）	（口縁部）　ゆるやかではあるが「く」の字型に外折して外上方へひろがり端部で上方につまみ上げたように肥厚する。 内外面ともナデ調整を施す。 （胴部）　最大径は中位に有し整形が粗雑である。外面は全体に縦方向の刷毛目が施されているが摩耗している。内面はヘラ削りの後、ナデ調整が施されており、ヘラ痕が残っている。 底部は欠失する。	外面は黄茶褐色内面は暗茶褐色。 砂粒をごくわずか含む精良な粘土。	大溝B 褐色砂質土
10	口径　14.9 胴径　16.2 器高　13.8	（口縁部）「く」の字に外折し、やや外弯ぎみに外上方へ開く。 内外面共にナデ調整を施されている。 （胴部）　最大径を中位に有する球形の丸底。 外面は、全体に縦方向に刷毛目を施している。 内面はナデ調整が施されているが3条の粘土紐接合痕を残している。底部との接合痕をくっきりと残す。	灰黄褐色 胴部に11×8の黒色斑。 0.1～0.5の砂粒を多く含む。	大溝B 灰色砂層

鍋

番号	法量 cm	個々の特徴	色調・胎土cm	備考（出土地・層位）
11	口径 32.4 胴径 27.5 器高 12.9	（口縁部） 基部よりやや「く」の字型に外反し端部で丸くとじる。内外面ともナデ調整を施され刷毛目が残る。 （胴部） やや平らな底部からゆるやかにのびて口縁部へ続く。外面は底部と基部との中間に段をもつ。口縁部より段の所まで縦の刷毛目をもち段より下は乱方向の刷毛目が施される。内面も段をもちナデ調整が施されている。	黄褐色。 底部に16×13の黒色斑をもつ。 0.1～0.3程度の砂粒を含み軟質。	大溝B 褐色砂質土

手捏ね土器

番号	法量 cm	個々の特徴	色調・胎土cm	備考（出土地・層位）
12	口径 10.6 器高 4.0	（口縁部） 内弯し、端部は内傾する。 （体部） 尖がり気味の底部をもち、内外面は全体にナデ調整が施されているが、手捏ねの指圧痕が残っており、粗雑で肉厚なつくりである。	灰黄褐色。 少量の砂粒を含む。 焼成は軟質。	大溝B 灰色砂層
13	口径 9.3 器高 3.2	（口縁部） わずかに外反し端部は丸くとじる。 （体部） 平坦な底部中央は肥厚する。外面はナデ調整を施し、内面は指整形の後、調整は行っていない。内外面共に指圧痕を残す。	黄褐色を呈すが外面の一部は赤っぽい。	大溝B 灰色砂層
14	口径 9.2 器高 3.8	（口縁部） 内弯し、端部は内傾する。 （体部） 口縁部より序々に肥厚し底部中央に最も厚くなる。内	黄褐色。 ごく少量の砂粒を含む。	大溝B 灰色砂層

14		外面ともにナデ調整が施され内面の底部には、ヘラ削り痕があり、指圧痕が残っている。		
15	口径　8.7 器高　4.2	(口縁部)　半球形の器体で口縁部は垂直ぎみにたつ。 (体部)　丸くおさまるが底部にやや平らな面をもつ。内外面共にナデ調整が施されているが内面はヘラ痕が残る。	淡黄褐色。 口縁部から中位にかけて4×2の黒色斑。 0.1程度の砂粒を含む精良な粘土。	大溝B 灰色砂層

把手付椀形土器

番号	法量 cm	個々の特徴	色調・胎土cm	備考(出土地・層位)
16	口径　6.5 器高　6.5	(口縁部)　少し内弯し、端部で薄くなり丸くとじる。内外面ともにナデ調整。 (体部)　上部で少しひろがるが、ほぼ垂直で中位に把手がつく。外面は刷毛目、内面はナデ調整が施されているが、棒による刺突、指圧痕が強く残る。	黄褐色。 外面底部は、赤褐色。 精良な粘土。	大溝B 灰色砂層

土師器椀

番号	法量 cm	個々の特徴	色調・胎土cm	備考(出土地・層位)
17	口径　15.3 器高　7.1	(口縁部)　内弯して端部は内傾面をもってとじる。 (体部)　外面は縦方向の刷毛目が施されているが大部分が消えている。4条の粘土紐接合痕が残っている。 (底部)　平面に近い。内面はヘラ削りの後ナデ調整が施されており指圧痕が認められ、底の一部がはがれている。	黄褐色を呈し口縁部下より底部にかけて9.8×8の黒色斑。 0.1程度の砂粒を含み、やや軟質。	大溝B 灰色砂層

18	口径　16.8 器高　8.1	(口縁部)　少し内弯し、端部で薄くなり丸くとじる。 (体部)　外面は、縦方向の刷毛目が施され、粘土紐接合痕、指圧痕が残る。 内面は、ヘラ削りの後、ナデ調整が施されている。 (底部)　丸底で乱方向の刷毛目が施されている。	黄褐色で部分的に赤茶褐色。10×7.5の黒色斑。 0.1程度の砂粒を含む。	大溝B 灰色砂層

土師器壺

番号	法量 cm	個々の特徴	色調・胎土cm	備考(出土地・層位)
19	口径　9.7 器高　12.2 胴径　12.0 口頸部高　4.2 胴部高　8.0	(口頸部)　基部よりややまっすぐに上方にのびており、長い口頸部は端部にてやや外弯する。内外面ともにナデ調整が施されている。 (胴部)　最大径を中位に有する丸底の球形の器体は、外面はヘラ削りが少し残るが摩耗がひどい。内面はヘラ削りの後、ナデ調整が施されている粘土紐接合痕を3条残す。	全体に赤っぽい茶褐色。 0.1～0.3の砂粒を含む。	大溝B 灰色砂層

土師器高杯

番号	法量 cm	個々の特徴	色調・胎土cm	備考(出土地・層位)
20	口径　17.5 裾部径　12.8 (推定) 器高　14.2 (推定) 杯部高　3.7(内) 5.0(外)	(杯部)　浅い杯部で底部と口縁部の境界がなく脚部から外上方にのびて口縁端部に至る。内外面ともにナデ調整が施されている。 (脚部)　脚柱部からゆるやかに裾部に至る。脚柱部外面は回転ナデ調整が施されている。裾部は欠失している。	淡灰黄褐色。 0.3以下の砂粒を多く含むが0.1以下のものが特に多い。	大溝B 灰色砂層

21	口径　16.5 裾部径　12.7（推定） 器高　14.5（推定） 杯部高　5.3	（杯部）　浅い杯部で脚部から外上方へのび、口縁端部でやや立ち上がる。杯部と脚部のつけねに指圧痕が残る。内面は、ヘラ削りの後ナデ調整が施され指圧痕が残る。 外面は、刷毛目が施されているが、摩耗の為、大部分消えている。 （脚部）　脚柱部上半が中実の脚部で脚柱部はほとんど開がらず裾部で開がり、脚柱部に縦方向の刷毛目が施され、裾部は欠失している。	赤みのある茶褐色。 0.1～0.6の砂粒を多く含む。	大溝B 灰色砂層
22	口径　16.4 裾部径　11.2 器高　16.3 杯部高　5.0	（杯部）　埦形で内外面共に回転ナデ調整が施され、外面は縦方向の刷毛目が脚部とのつけねにみられる。 （脚部）　脚柱部上半が中実の脚部で脚柱部はほとんどひろがらずに裾部でひろがり、脚柱部をにぎりしめた痕跡があり、斜方面及び縦方向の刷毛目が施され裾部は縦方向の刷毛目で端部はゆるくナデ調整が施されている。	赤茶褐色。 0.1～0.2の砂粒を含む。	大溝B 灰色砂層

長胴甕

番号	法量 cm	個々の特徴	色調・胎土cm	備考（出土地・層位）
23	口径　20.8 胴径　25.6 器高　35.4	（口縁部）　傾斜する口縁部は、「く」の字に外折し外反ぎみに外上方へのびてとじる。内外面共にナデ調整が施され、内面は不規則な横方向の刷毛目が施され、ており外面は指圧痕を認める。 （胴部）　胴長で最大径を中位よりやや下にもつ丸底の器体。	灰褐色。 0.1～0.4程度の砂粒を含む。 胴部に27×18の黒色斑。	大溝B 灰色砂層

23		中位より下にゆるやかな段をもつ。外面は全体に不規則な縦方向の刷毛目が施され、底部は乱方向の細い刷毛目が施されている。内面はヘラ削りの後、指整形している。		
24	口径　18.9 胴径　22.7 器高　35.2	(口縁部)「く」の字に外折し外反ぎみに外上方へのびてとじる。内外面ともにナデ調整が施され内面には、刷毛目がわずかに残る。 (胴部)　胴長の器体で丸底外面は、全体に縦方向の刷毛目が施され、底部は乱方向の刷毛目が施されている。内面はヘラ削りの後、ナデ調整が施されている。	黄褐色。 外面は胴部半面に黒褐色斑。	大溝B 灰色砂層
25	口径　22.5 胴径　25.1 器高　41.0 (推定)	(口縁部)「く」の字形に外反ぎみに外上方へのびてとじる。内外面共にナデ調整が施され、内面には刷毛目がわずかに残る。 (胴部)　胴長の最大径を中位にもつ器形。内面には、ナデ調整。外面には縦方向の刷毛目が施され、底部は欠失している。	黄褐色。 ところどころに赤味を帯びている。口縁基部5㎝下に4×3.5、胴部最大径より下部に21×13.5の黒色斑をわずかに含む。	大溝B 灰色砂層
26	口径　20.5 胴径　25.9 器高　40.0	(口縁部)「く」の字形に外折し外上方へひらく。内面は横方向の刷毛目が施され、外面にはヘラ削り痕と指圧痕を認める。 (胴部)　胴長の丸底器体。外面は縦方向、底部は乱方向の刷毛目が施されている。内面は、回転ナデ調整がなされている。	黄褐色。 0.1～0.3の砂粒を含む。 胴部に12×17の黒色斑。	大溝B 灰色砂層

須恵器杯身

番号	法量 cm	個々の特徴	色調・胎土cm	備考（出土地・層位）
27	口径 12.3 器高 3.9 たちあがり高 0.8 受部径 14.4	（口頸部） 内傾して短くたち、端部は丸くとじる。 （受部） 外上方へ突出し、端部は丸くとじる。 （体部） 比較的浅く、底部は、調整されておらず、受部との間に段をもつ。 内面は、回転ナデ調整が施されている。	青灰色。 ごく少量の砂粒を含む。 精良な粘土で焼成は堅緻。	大溝B 淡黄褐色砂層
28	口径 12.4 器高 4.0 たちあがり高 0.9 受部径 14.4	（口頸部） 外上方へのびる。口縁部の端部は丸くとじる。内外面ともに回転ナデによる調整が施されている。 （底部） やや丸い底は未調整で粗い。外面底部は回転ナデ調整が施されている。内面は凹を有する。	暗灰色。 外面は黒色塗付物が付着。 精良な粘土を使用し、焼成は堅緻。	大溝B 淡黄褐色砂層
29	口径 12.6 器高 4.3 たちあがり高 0.9 受部径 15.1	（口頸部） 内傾したのち短くたち、端部は丸くとじる。 （受部） ほぼ水平に短く突出する受部は、基部に凹部をもち端部は鈍い陵をもつ。 （体部） 比較的浅い。外面は、受部から底部にかけて3段くらいのゆるやかな段をもち、回転ナデ調整が施されている。内面は、回転ナデ調整が施され、中央底部に窪みをもつ。	白灰色。 精良な粘土であるが、たちあがりに0.6～0.7の小石、2個混入している。 焼成は堅緻。	大溝B 淡黄褐色砂層

須恵器長頸壺

番号	法量 cm	個々の特徴	色調・胎土cm	備考（出土地・層位）
30	胴径 13.8 残高 14.2	（口縁部） 欠失する。 （胴部） 最大径を中位にもち頸	頸部から胴部中位にかけて	大溝B 淡黄褐色砂層

30		部から胴部にかけてなだらかなふくらみをもつ丸底の器体。胴部、底部ともヘラ削りのあとナデ調整を施しているが底部の調整は粗く指圧痕が残っている。内面底部は棒による刺突が多数みとめられる。	灰色。胴部以下から底にかけ暗灰色。0.1～0.3の砂粒を含む。精良な粘土で焼成は堅緻。	

灰釉皿

番号	法量 cm	個々の特徴	色調・胎土cm	備考（出土地・層位）
31	口径 12.3 器高 2.6 高台径 6.5	（口縁部）上外方にのび端部は丸い。 （底部）浅く平ら。 （高台）体部との境より八の字形に張り出して付す。 マキアゲ、ミズビキ成形。 （底部）糸切り調整。他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	白灰色。精良な粘土。焼成は良好で堅緻。	G－07 大溝A 褐色砂質土

黒色土器

番号	法量 cm	個々の特徴	色調・胎土cm	備考（出土地・層位）
32	口径 14.0 器高 5.2 高台径 7.3	（口縁部）外上方へのびる。 口縁部の端部は丸くとじる。 （底部）平坦な底部で内弯ぎみに立ち上がる。 （高台）三角形の断面を呈する高台をもつ。 体部外面は成形時の指圧痕が明瞭に見える。 口縁部及び体部内面はヨコナデを施している。 高台は、粘土紐を指で押えながらはりつけた後ヨコナデを施す。	外面は明赤褐色。内面は黒色。0.1～0.5の砂粒を含む。焼成は良好。	大溝A 褐色砂質土

33	口径 15.8 器高 6.3 高台径 7.4	(口縁部)　底部から直線的に外反する体部で口縁部端部はとがり気味にとじる。 (底部)　やや平坦で内弯ぎみに立ち上がる。 (高台)　断面が台形を呈して低い。 底部外面をヘラ削りし、その上に粘土紐をはりつけによる高台を指押えでつけ、ヨコナデを施す。 口縁部から体部内面にかけてヨコナデ、底部内面はナデを施す。	内外面とも黒色。 焼成はやや良好。	大溝A 褐色砂質土
34	口径 13.6 器高 5.7 高台径 7.3	(口縁部)　外上方へのびる。 口縁部で口縁に1条の沈線を施す。 (底部)　平坦な底部で内弯ぎみに立ち上がる。 (高台)　三角形の断面を呈する高台をもつ。 体部外面は成形時の指圧痕が認められる。 口縁内部にヘラケズリを施している。 外面はヨコナデを施す。 高台は、粘土紐を指で押えながらはりつけた後、ヨコナデを施す。	外面は明赤褐色。 内面は黒色。 0.1～0.5の砂粒を含む。 焼成は良好。	大溝A 褐色砂質土

須恵器高杯

番号	法量 cm	個々の特徴	色調・胎土cm	備考(出土地・層位)
35	裾部径 6.5 残高 4.8	(脚部)　基部より外反したのち裾部で水平に開き、さらに短く垂直におりて端部につづく。裾部より少し上方に径0.6の円孔を3ケ所穿つ。穿孔は外面から	白灰色。 ごく少量の砂粒を含む。 焼成はやや軟質。	大溝B 淡黄褐色砂層

35		内面へ向けて行なっている。脚部と裾部に段をもつ器形。		

無蓋高杯

番号	法量 cm	個々の特徴	色調・胎土cm	備考（出土地・層位）
36	口径 11.9 裾部径 8.8 器高 10.4 杯部高 5.9 胴部径 12.5	（口縁部） 垂直にのび端部は丸い体部中央に2条の沈線が施されている。 （脚部） 下外方に開き裾部で短く水平にのび下方に屈曲し端部は丸い。内外面共に回転ナデ調整が施され、ロクロは右回転である。外底面を貼り付けた時に回転ナデによる調整が施されているが精巧ではない。底体部は深く未調整のままで、やや丸い。	外は紫灰色。 内は暗灰色。 0.1～0.2の砂粒を含み精良な粘土で焼成は堅緻。	大溝B 暗灰色粘土層

須恵器無蓋高杯

番号	法量 cm	個々の特徴	色調・胎土cm	備考（出土地・層位）
37	口径 10.0 裾部径 9.9 器高 11.3 杯部高 7.7 胴部径 11.2	（口縁部） やや内傾にのびた後垂直にのび、端部は丸い。 （胴部） 中位よりやや上方に2条の沈線が施されている。最大径を下位に有し、基部にかけてゆるやかな段をもち、脚柱部より外方し裾部から端部近くで段を成す。内外面共に回転ナデ調整を施され、内面底部は未調整のままである。	暗灰色。 ごく少量の砂粒を含む。 精良な粘土で焼成は堅緻。	大溝B 褐色砂質土

甕

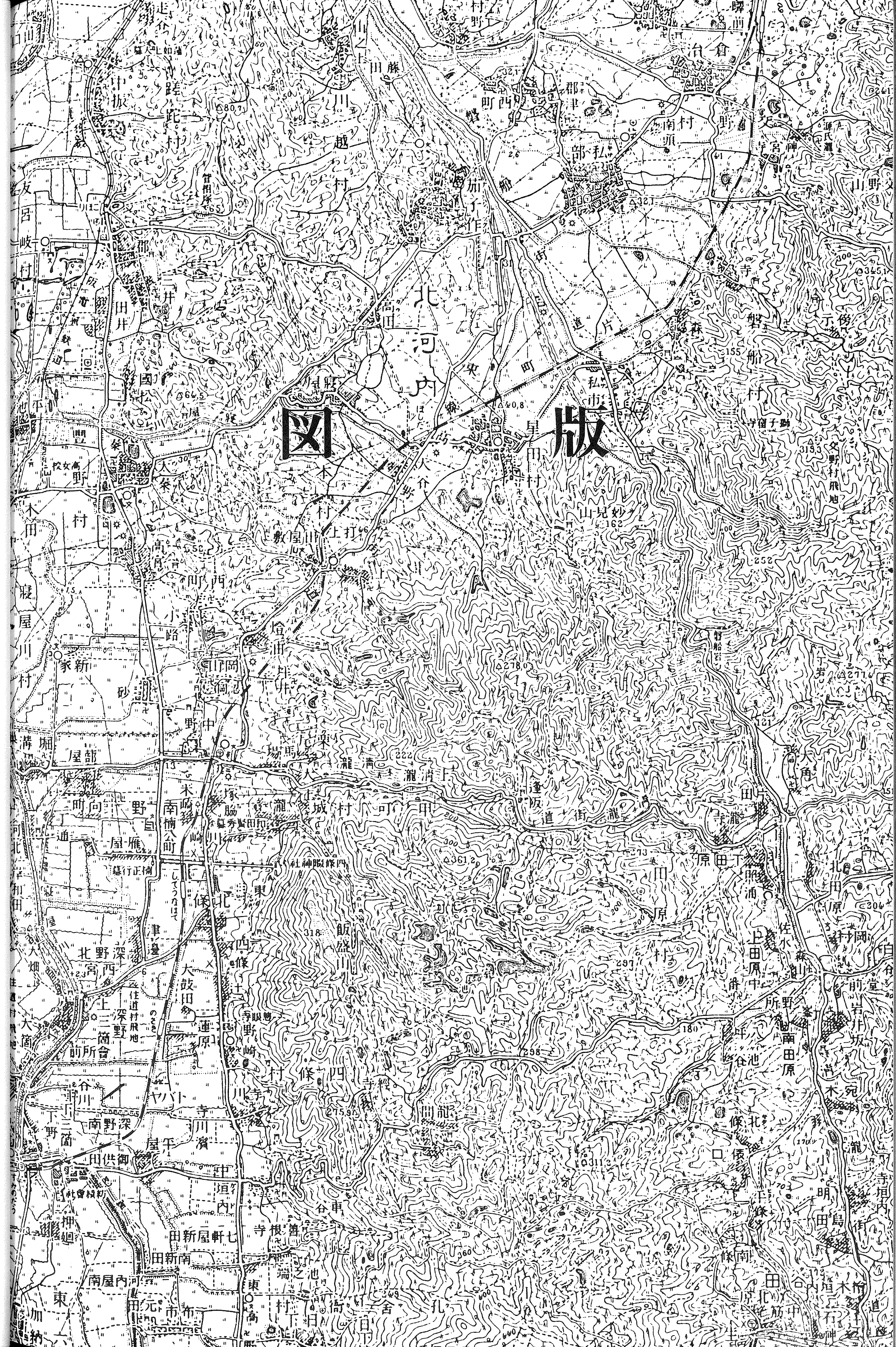
番号	法量 cm	個々の特徴	色調・胎土cm	備考（出土地・層位）
38	口径 20.5 胴径 18.5 器高 25.0 （推定）	（口縁部）「く」の字に外折し内反ぎみに外上方へのびる長い口縁部は端部で丸くとじる。 （胴部） 最大径を中位にもつ器体で、外面は肩まで縦方向、中位下は乱方向の刷毛目を施す。内面は、ヘラナデ調整が施され指圧痕が残る。底部は欠失している。	黄褐色。 胴部は茶褐色で全体にススが付着、内面は黒褐色。 焼成は軟質。	大溝B 褐色砂質土
39	口径 19.7 胴径 21.3 器高 30.9 （推定） 口縁部高 3.0 鍔径 25.4	（口縁部） 基部はくり返しのナデのために外弯し、ゆるやかに外反する。端部では、方形ぎみにおさまり陵をもつ。ナデ調整が施されている。口縁部と胴部のつけ根に鍔がつき水平にのび端部で丸くとじる。 （胴部） 胴長の器体で丸底。全体に縦方向の刷毛目が施され底部は欠失している。内面はヘラ削りののちナデ調整が施されているが粗雑な調整で指圧痕が残る。	口縁部鍔は、赤っぽい黄褐色。 胴部は茶褐色で全体にススが付着。 内面は黄褐色。 0.1～0.2の砂粒を含み軟質。	大溝B 灰色砂層

土師器大鉢

番号	法量 cm	個々の特徴	色調・胎土cm	備考（出土地・層位）
40	口径 34.2 器高 39.3 胴径 32.3	（口縁部） ほぼ直線的にやや外反しながら上方にのびる体部、口縁部を有す。 口縁端部は、やや内傾しながら尖がり気味におわる。 （底部） 外面はヘラケズリを行い底部は欠失している。	赤っぽい黄褐色。 内面は全体的にススが付着している。 0.1～0.3程度の砂粒を含む。 焼成は軟質。	大溝B 灰色砂層

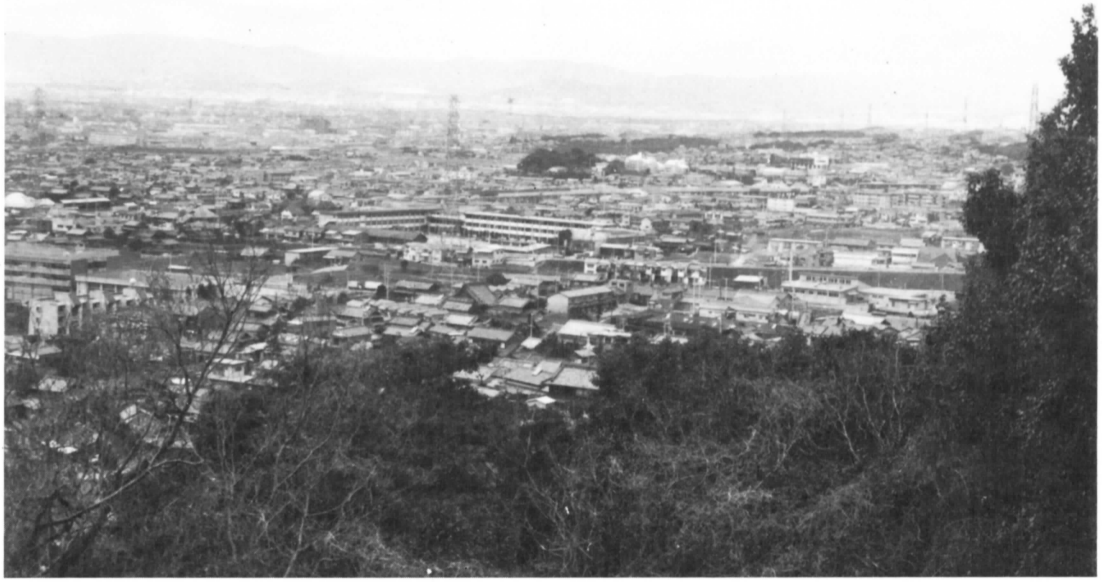
40		（体部）　外面全体に縦方向の刷毛目を施され、内面接合痕が明瞭に見られ、ヨコナデ調整が施されている。 刷毛目の施し方については、大甕同様である。		

図版



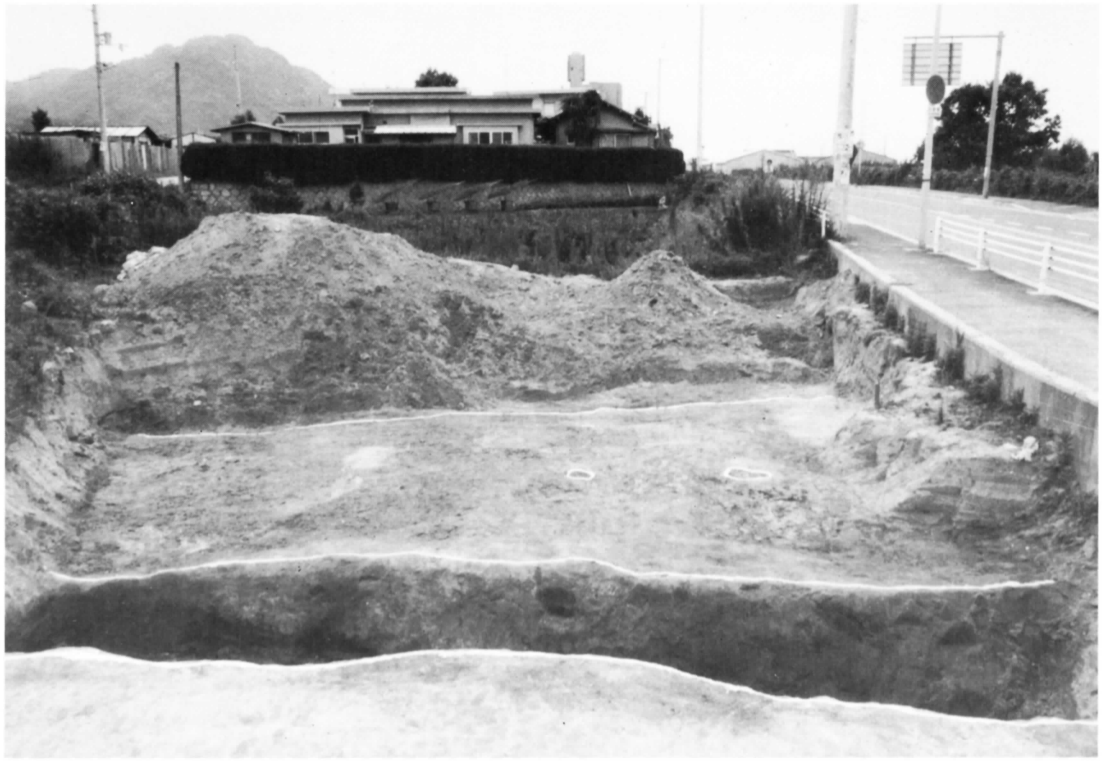
図版1　遺跡周辺の航空写真

図版2　岡山南遺跡遠景



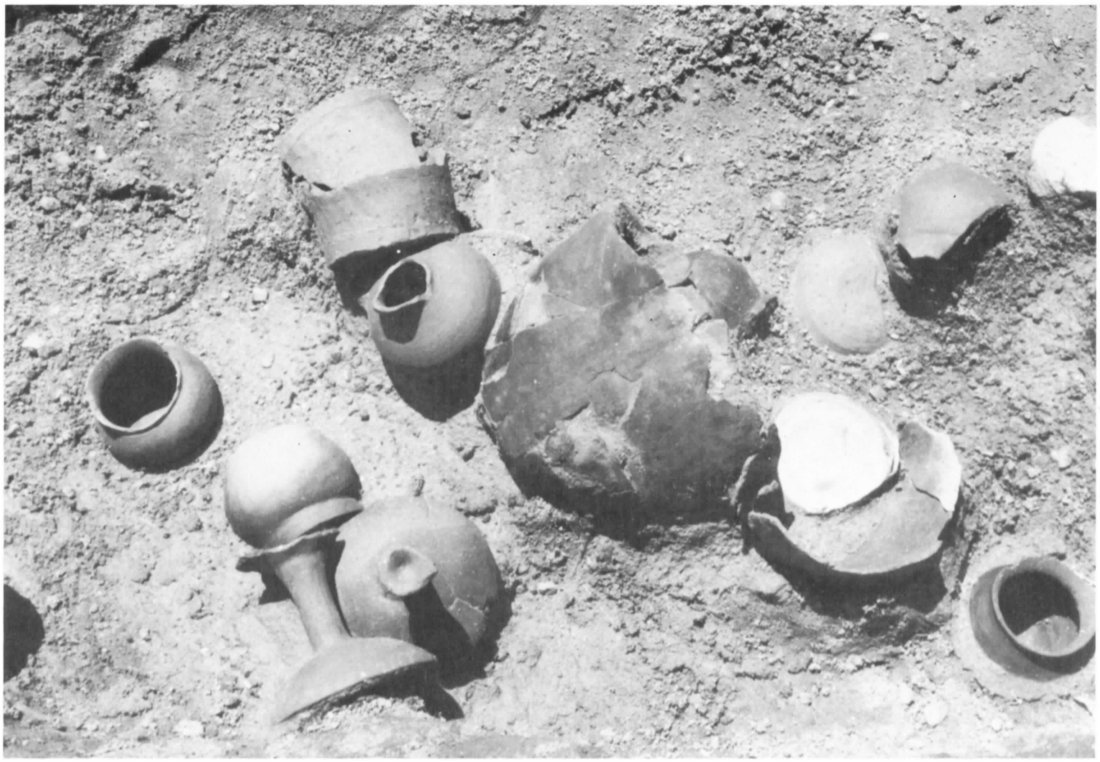
図版3　調査前全景及び遺構検出状況

図版4　大溝A・大溝B全景



図版5　大溝B内土器出土状況

図版6　大溝B内土器出土状況



図版7　大溝B全景及び断面

1

3

10

5

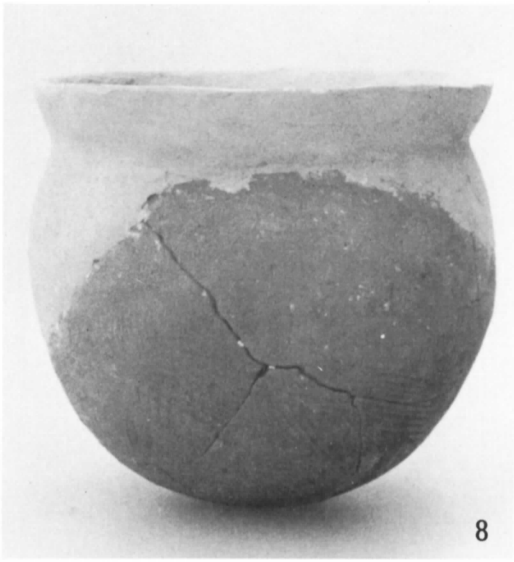
2

19

図版9　遺物写真・土器Ⅱ

6

4


8

7

9

38

18

17

22

20

21

39

図版11　遺物写真・土器Ⅳ

23

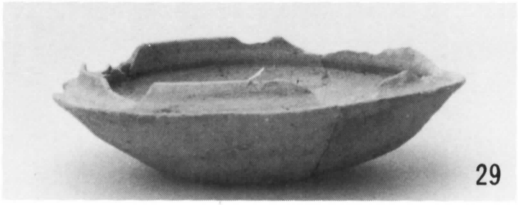
24

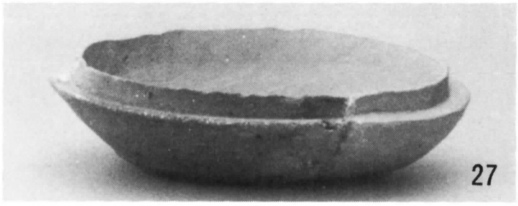
26

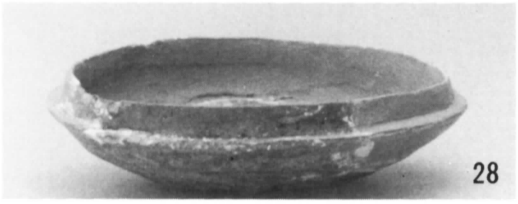
25

11

40


29


27


28

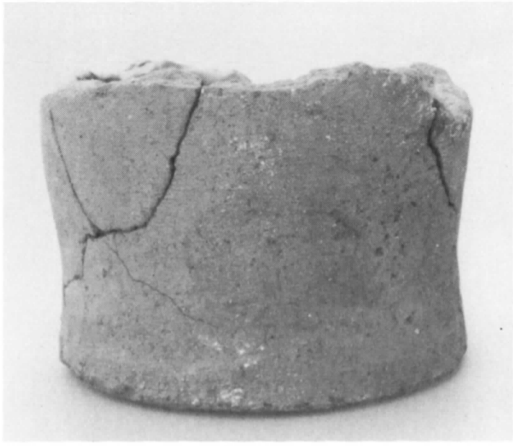
16

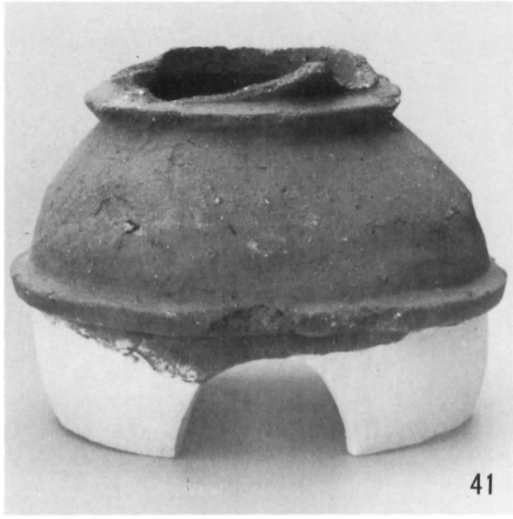
36

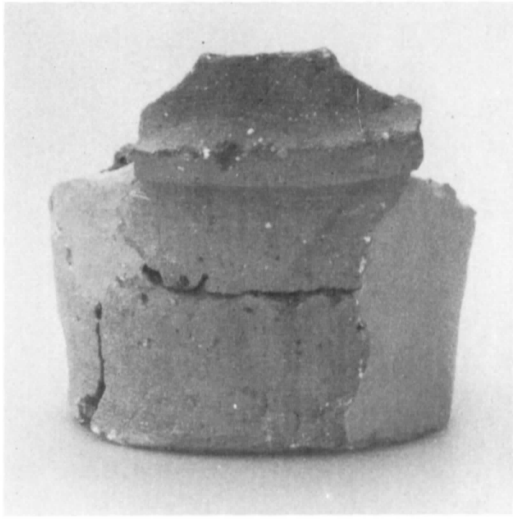
37

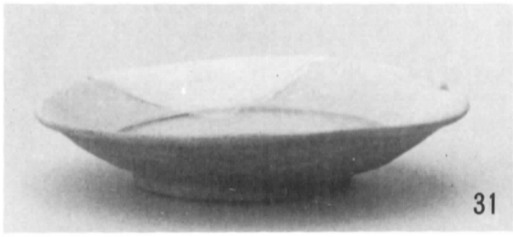
30

図版14　遺物写真・土器Ⅶ・円筒埴輪

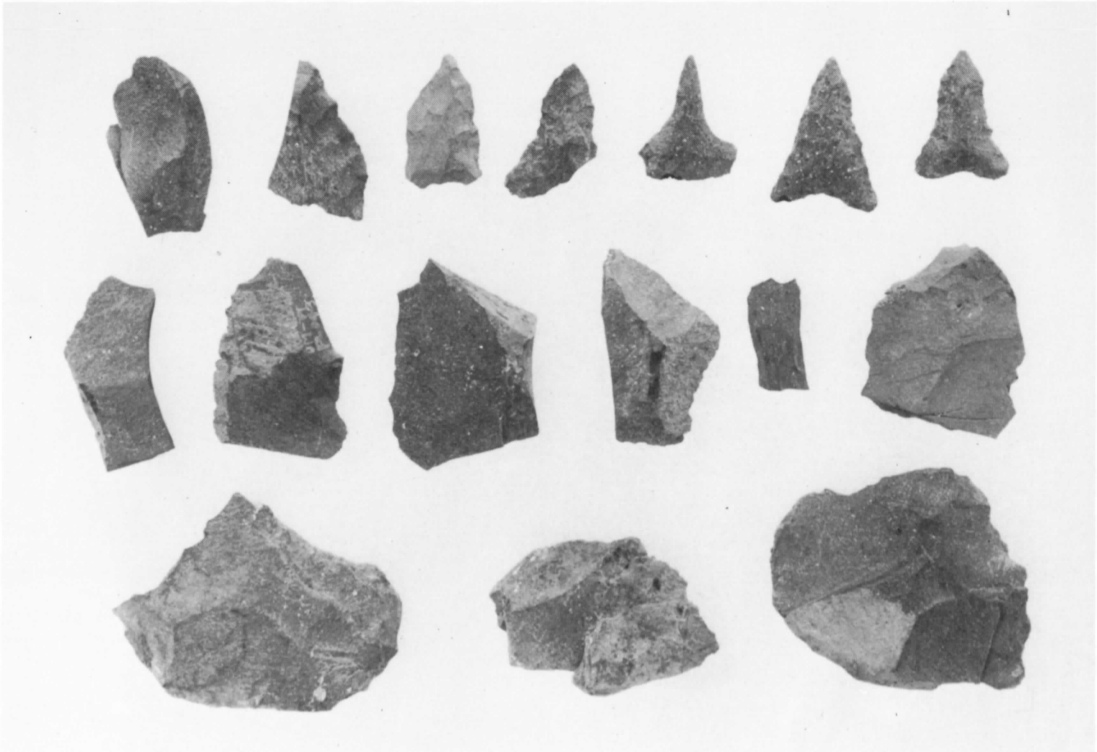




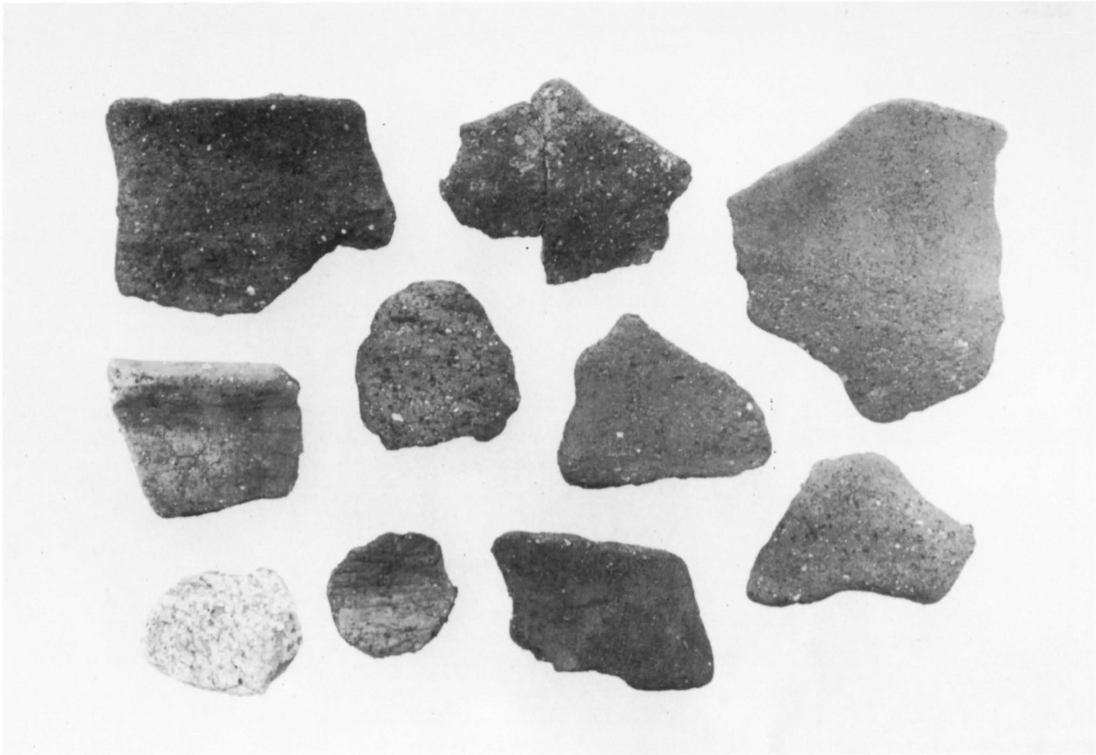




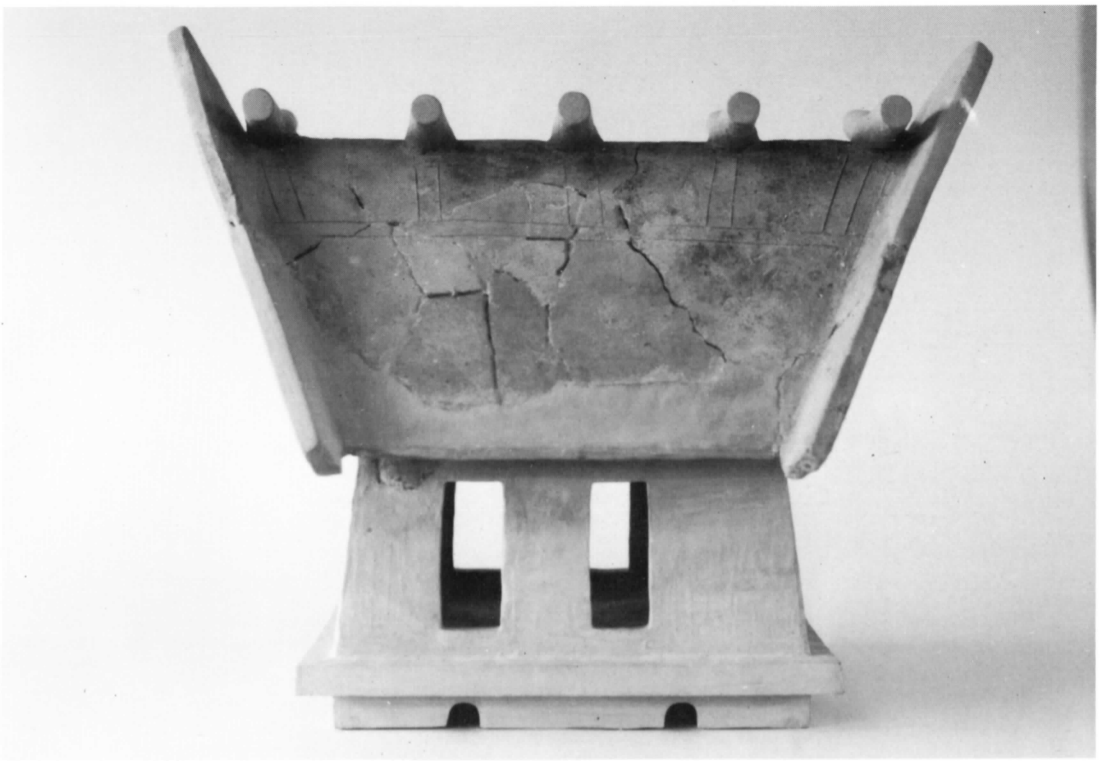
図版15　遺物写真・石器Ⅰ・土器Ⅷ



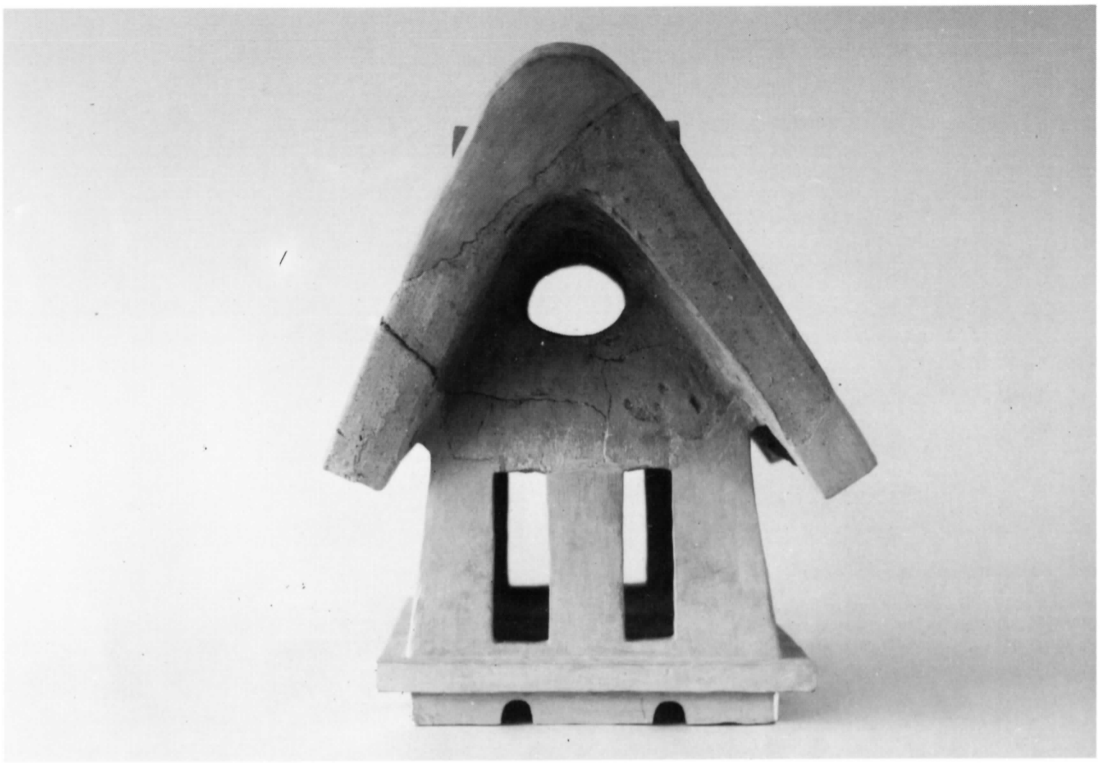
図版16　遺物写真・土器Ⅸ



図版17　大溝B内伴出遺物・Ⅰ



図版18　大溝B内伴出遺物・Ⅱ



岡山南遺跡発掘調査概要・Ⅱ

昭和57年3月　発行

編集
発行　四條畷市教育委員会
四條畷市中野653

印刷　田中耕株式会社